

42349

教科書文庫

4
815
42-1937
2000.0 33994

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

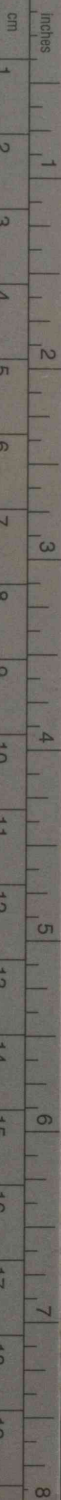


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫  
4  
815  
42-1937  
2000033994

八波則吉著

現代女子日本文法

上級用



阪大 京東

行發社進英



昭和二十年十月二十九日  
文部省檢定  
高等學校國語科用

教科書文庫  
4  
815  
42-1937  
2000033994

資料室

375.9  
Y020

八波則吉著  
現代女子日本文法

東京大阪  
英進社發行

広島大学図書

2000033994



廣島大學圖書印



一本書は昭和十二年三月二十七日改正の教授要目に準據し、高等女學校上級用の國文法教科書として、既習の文法的事項を整理し、文語法の大要を授ける爲に編纂したものである。

一初學年用との聯繫に注意し、相俟つて日本文法についての確實な知識を得させるやうにつとめ、特に助動詞、助詞の説明には細心の注意を拂つて學習を容易ならしめるやうにした。

一文章法は平易簡明にして、その大要を會得せしめるに努めた。

一反復練習は文法教授上最も有効なることを考へ、各章とも練習題を豊富にし、高等女學校用國語讀本その他各方面から興味あるものを採擇した。

現代 女子日本文法 上級用

目次

品詞	.....	一
第一章 名詞・數詞・代名詞	.....	四
第二章 動詞	.....	一〇
一 活用形	.....	一〇
二 文語動詞の活用の種類	.....	一五
三 文語動詞の活用の種類の見分け方	.....	二四
四 語尾の紛れ易い文語動詞	.....	二六

目次

五 十 音 圖

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	
行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	
わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	ア段
る	り	い	み	ひ	に	ち	し	き	い	イ段
う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	ウ段
ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	エ段
を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お	オ段

第三章	形容詞附形容動詞	一四
	一 文語形容詞の活用	一四
	二 文語形容動詞の活用	一五
第四章	音 便	一六
第五章	助 動 詞	一四
	一 文語助動詞の種類と活用	一四
	二 助動詞の用法	一五
第六章	副 詞	一六
第七章	接 續 詞	一七
第八章	文語助詞の用法	一八
第九章	感 動 詞	一九
第十章	紛れ易い文語品詞	二〇

目次 文……………二二

第一章	文 の 成 分	二二
第二章	文の成分の位置及び省略	二六
第三章	節	二四
第四章	文 の 種 類	二七
附 録		
	文法上許容スベキ事項	一
附 表		
	動詞の活用表	

形容詞の活用表  
 助動詞の活用表  
 動詞と助動詞との接續表

目次終



現代 女子日本文法 上級用

品詞

一 天に二日なく地に二王なし。

二 野にも山にも櫻の花が美しく咲いてゐる。

右の例の(一)は文語で八つの言葉の單位に分れ、(二)は口語で十四の言葉の單位に分れる。かやうに、文法上言葉の單位として取扱はれるものを單語といふ。

○以下範例並に練習題には、口語に限つて(口)のしるしを附ける。

單語は、その意義や、形態や、職能によつて、次の十種に分たれ、その各を品詞といふ。

單語  
品詞

品詞

名詞 數詞 代名詞 動詞 形容詞 助動詞 副詞  
接續詞 助詞 感動詞

體言  
用言

接頭語

十品詞のうち、名詞・數詞・代名詞は事物の本體をあらはすものであるから、これを總稱して體言といひ、動詞・形容詞・助動詞は事物の作用をあらはすものであるから、これを用言といふ。

三 さ夜ふけて、ほの暗きみあかしの影ものさびし。  
四 風采は頗るけ高いが、身體がどことなく弱く見える。(口)  
右の例の傍線を施した語のやうに、單語として獨立しないで或語の上に添へて用ひられるものを接頭語といふ。

- 五 やうく春めきて草木も芽ぐみ、小鳥もたのしげにさへづる。
- 六 皆さん、どうか女らしい態度を失はないやうにして下さい。(口)

接尾語

右の例の傍線を施した語のやうに、單語として獨立しないで或語の下に添へて用ひられるものを接尾語といふ。  
接頭語又は接尾語の附いて出來た語は、これを合せて一品詞とする。

練習

次の文から接頭語接尾語を選び出しなさい。

〔例〕 お隣の雅子さんも私達といつしよに行くことになつてゐます。(口)

- 一 み山の奥の柚人もわが大君の大御代をことほぎまつる。
- 二 同じ自然の御母の、御手に育ちし姉と妹、み空の花を星といひ、わが世の星を花といふ。
- 三 屋根の上に霜がまつ白だ。庭の菊も白い花びらに赤みがさして

來た。霜にあたつたからだらう。(口)

第一章 名詞・數詞・代名詞

一 「大原や蝶の出で舞ふおほろ朧月」この句を芭蕉が見て、「實に秀逸だ。」と言つた。(口)

右の例の、大原・芭蕉のやうな地名・人名はその地・その人に限つた名で他の地・他の人には通用しない。このやうな名詞を固有名詞といひ、これに對して蝶・朧月・句・秀逸のやうに、同じ種類のいづれの事物にも用ひられる名詞を普通名詞といふ。

○名詞の複數をあらはすには、人々・國々・所々・隅々のやうに同じ語を重ねるものと、諸人・諸國・衆・數・時間のやうに接頭語を冠らせるものと、親たち子供らおろひと私ども先生がたのやうに接尾語を添へるものがある。

普通名詞  
名詞の複數

固有名詞

二 九月十三夜の月隈もなかりければ、兄弟二人庭に出て遊びけり。

三 一千メートルの競走で、永野さんは第一着となつたので一等賞を得た。(口)

右の例の、二人・一千メートルのやうに事物の數量をあらはす單語を量數詞といひ、九月十三夜・第一着・一等賞のやうに事物の順序をあらはす單語を序數詞といふ。

四 我、汝と共に彼を訪ねん。  
五 あなたはどなたですか。(口)

右の例の傍線を施した語のやうに、人の名の代りに用ひられる代名詞を人代名詞といふ。

人代名詞のうち、話す人自らの名の代りに用ひるのを自稱(または第一人稱)といひ、相手の名の代りに用ひるのを對稱(または第二人稱)

量數詞  
序數詞

人代名詞

自稱

對稱



他稱  
不定稱

といひ、自分でも對手でもない外の人の名の代りに用ひるのを他稱または第三人稱といひ、不明又は不定の人の名の代りに用ひるのを不定稱といふ。  
人代名詞のおもなものを表示すれば次のやうである。

自稱	對稱	他稱	不定稱
わ、われ	な、なんぢ	か、かれ	た、たれ
おの、おのれ	あなた(口)	あ、あれ(口)	だれ(口)

○この外、自稱にわたくし、自分など、對稱におまへなど、他稱にあのかた、不定稱にどなたなどその類が甚だ多い。

- 六 これとそれといづれかまされる。
- 七 叔父さん、ここはどこですか。(口)
- 八 山のすその方があちら、こちらは白いのは蕎麥の花であら

物代名詞  
近稱  
中稱  
遠稱  
不定稱

右の例の傍線を施した語のやうに、事物・場所・方向の名の代りに用ひられる代名詞を物代名詞といふ。  
物代名詞のうち、自分に近いものを指すのを近稱といひ、稍離れたものを指すのを中稱といひ、遠いものを指すのを遠稱といひ、不明又は不定のものを指すのを不定稱といふ。  
物代名詞のおもなものを表示すれば次のやうである。

う。(口)

近稱	中稱	遠稱	不定稱
こ、これ	そ、それ	か、かれ	いづれ
ここ	そこ	あ、あれ(口)	なに
		あそこ(口)	ど、どれ(口)
		かしこ	いづく
		あそこ(口)	どこ(口)

代名詞の複數

○代名詞の複數をあらはすには、われわれになにのやうに同じ語を重ねるものと、諸姉のやうに接頭語を冠らせるものと、われらお前たちあなたがた私どものやうに接尾語を添へるものがある。

向	方
こちら(口)	こち
そちら(口)	そち
あちら(口)	あち
こなた	そなた
そつち(口)	そなた
あつち(口)	あなた
どつち(口)	あなた
どちら(口)	あなた
	いづち
	いづかた
	どつち(口)
	どちら(口)

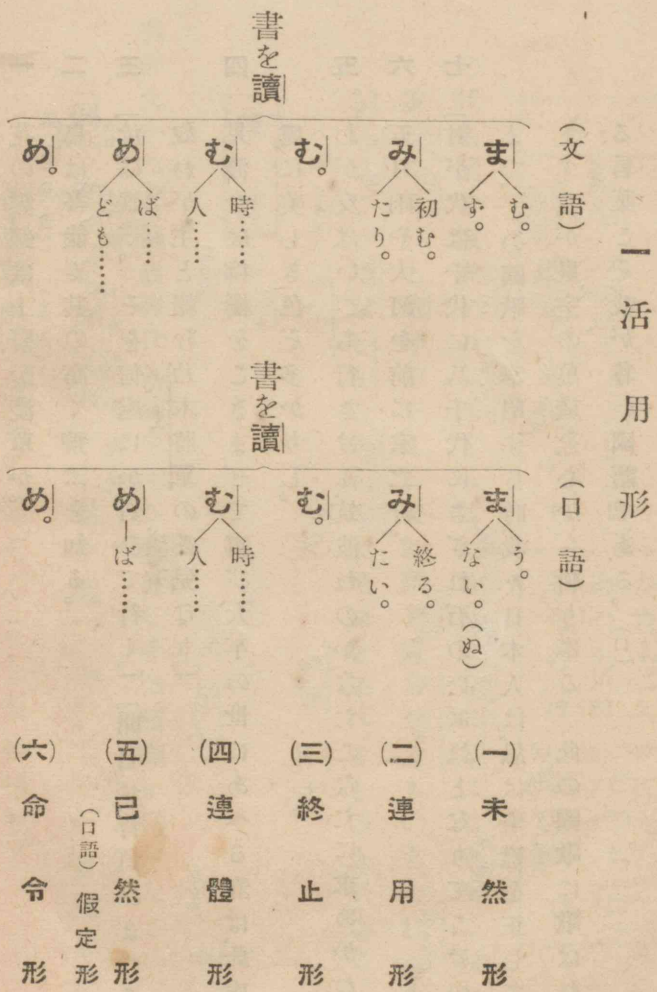
練習

次の文から名詞・數詞・代名詞を選び出してその種類を述べなさい。

〔例〕貫之等古今集二十卷を選び奉りて、その身死したらん後、後にも敷島の道永く榮えんことを喜び。

- 一 花の雲、鐘は上野か淺草か。
- 二 鳥は吾能く其の高く飛ぶを知る。
- 三 「汝は誰ぞ。そを何處にか負ひて行く。」一聞召せ、背負ひまつるは、奴わが主と頼む乃木將軍の愛兒なり。
- 四 見渡せば柳櫻をこきまぜて再び太平の世にあへる春は、此處に彼處に美しき色ぞ多かりし。
- 五 わが友はいづち行きけん、鏡波ねのかなたこなたに求めかねつも。
- 六 五月雨や大河を前に家二軒。
- 七 「君が代は千代に八千代にさざれ石のいはほとなりてこけのむすまで、この國歌を奉唱する時、我々日本人は、思はず襟を正して榮えます。我が皇室の萬歳を心から祈り奉る。此の國歌に歌はれてゐる言葉こそ、我が尊い國語である。(口)

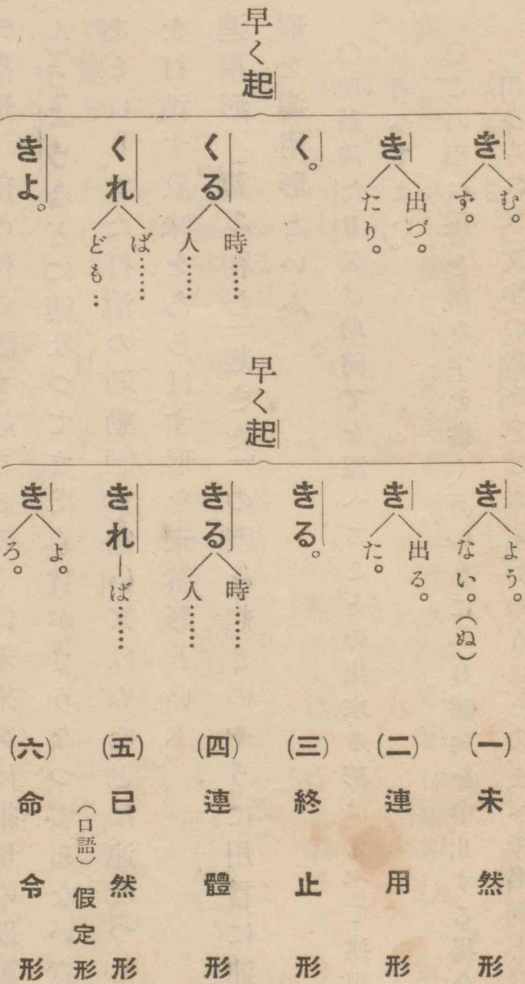
第二章 動詞 一活用形



語幹 語尾 活用

右の例のやうに、動詞にはその語形の變化しない部分即ち語幹と、變化する部分即ち語尾とがあり、その變化即ち活用は五十音圖の同一行内において行はれる。

活用のおのゝの形を活用形といふ。活用形には右に擧げたや



うに未然形・連用形・終止形・連體形・已然形(口語では假定形)・命令形の六種がある。

○この名稱は、それ／＼その用ひ方の一部について便宜上名づけたもので、各形の用ひ方が、これに盡きてゐるのではない。

①未然形 前の例の「讀ま・起き」のやうに、未來又は推量の助動詞「む(ん)・う・よう」などに連なつて、まだ事實がさうなつてゐない意味をあらはし、また打消の助動詞「ず・ない」又は「ぬ」などに連なつて、物事を打消す意味をあらはす形を未然形といふ。

②連用形 「讀み・初む」「起きた」の「讀み・起き」のやうに用言に連なる形を連用形といふ。

○助動詞たり又は助詞てを添へることの出来る形は、すべて連用形と考へてよい。

○この形は「書」を「讀み、字」を「書く」のやうに一旦語句を中止する場合にも用ひられ、又「文字」の「讀み」をならふのやうにそのまゝで名詞となるこ

未然形

連用形

ともある。

終止形

③終止形 「讀む・起く」「文・起さる」(口)は文が終る場合に用ひられる形で、これを終止形といふ。

○「書」を「讀むべし」「悔ゆとも及ばじ」の「讀む・悔ゆ」は終止形であるが、終止しないで助動詞のべし、助詞のともとに連なつてゐる。

○終止形は動詞の本體であるから、動詞を擧げる時には常にこの形を示すのである。

連體形

④連體形 「讀む人」「起くる時」「文・起さる時」(口)の「讀む・起くる・起さる」やうに、體言に連なる形を連體形といふ。

○係に「ぞ・なむ・や・か」があれば、連體形を以て結ぶ。

已然形  
假定形(口)

⑤已然形 「讀めども」「起くれれば」の「讀め・起くれ」のやうに、事實がすでにさうなつてゐる意味をあらはす形を已然形といふ。

○係に「こそ」があれば、已然形を以て結ぶ。

○口語では「手紙」を「讀めば」様子が知れよう。「明朝五時に起きれば」一番

列車の間に合ふだらう。のやうに、物事を假定していふ形となるから、これを假定形と名づける。

●命令形 読め。起きよ。のやうに、命令の意味をあらはす形を命令形といふ。

練習

次の文から動詞を選び出し、その活用形を述べなさい。

- 一 拜殿の前に進みて整列し、謹みて拜し奉る。
- 二 時に歸りて故郷を訪へ。舊知の山川、君を迎へて往時を語らん。
- 三 汝若し成功を望まば、天の與へたる汝の長所に就け。
- 四 をりくにあそぶいとまはある人の、いとまなしとてふみよまぬ

〔例〕 ころよく我にはたらく仕事あれ、それを仕遂げて死なむとぞ思ふ。

あ  
はく  
お  
ま  
命令形  
連用

せせすすけ  
かな  
四段活用

- 五 紅の二尺のびたるばらの芽のはりやはらかに春雨のふる。
- 六 幾匹とも知れぬ鳥が、裏の森で騒ぎたててゐる。(口)

二 文語動詞の活用の種類

動詞の活用は口語では四段・上一段・下一段・カ行變格・サ行變格の五種であるが、文語では四段・上一段・上一段・下一段・下一段・下二段・カ行變格・サ行變格・ナ行變格・ラ行變格の九種がある。

●四段活用

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
行	か	き	く	く	け	け
ア段	イ段	イ段	ウ	段	エ	段

右の例のやうに、五十音圖のアイウエの四段に活用するものを四

上一段活用

段活用の動詞といふ。

○あらゆる動詞のうちで、この活用に属するものが最も多い。

●上一段活用

	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(着)	き	き	きる	きる	きり	きり	きよ
イ	段	イ	段	ウ	段	イ	段

右の例のやうに、五十音圖のイの一段だけに活用するものを上一段活用の動詞といふ。

○この活用に属する文語動詞は次の十數語ぐらゐるもので、語幹と語尾とを別つことの出来ないものが多い。

- カ行 着る。
- ナ行 煮る。似る。
- ハ行 乾る。簸る。

上二段活用

●上二段活用

○右のうち試みる用ゐるは、現代文では試む用ふと上二段活用の動詞として活用することが多い。

	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
起	き	き	くる	くる	くれ	きよ	
イ	段	ウ	段	イ	段	イ	段

右の例のやうに、五十音圖のイ・ウの二段に活用するものを上二段活用の動詞といふ。

○上二段活用の動詞は、口語では上一段活用となる。  
○忍ぶ・恨むは上二段活用の動詞であるが、現代文では四段活用として

下一段活用

④ 下一段活用

も用ひられる。

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(蹴 <sup>け</sup> )	け	け	ける	ける	けれ	けよ
エ						段

右の例のやうに、五十音圖のエの一段だけに活用するものを下一段活用の動詞といふ。

下一段活用に屬する動詞は蹴るの一語だけである。

○この活用も語幹と語尾とを別つことが出来ない。

○口語では、「けり」に蹴速<sup>はや</sup>を蹴<sup>け</sup>たふしました。といふやうに、ラ行四段に活用させることもある。

下二段活用

⑤ 下二段活用

ア、イ、ウ、エ

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
受	け	け	く	くる	くれ	けよ
エ		段	ウ		段	エ

右の例のやうに、五十音圖のウ・エの二段に活用するものを下二段活用の動詞といふ。

○下二段活用の動詞は、口語では下一段活用となる。

○この活用に屬する動詞は、四段活用の動詞についてその数が多い。

○ア行下二段活用の動詞得は、その語全體が變化して語幹と語尾とを別つことが出来ない。

⑥ カ行變格活用

カ行變格活用

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(來 <sup>く</sup> )	こ	き	く	くる	くれ	こよ
オ	段	イ	ウ		段	オ

右の例のやうに、**こきくくるくれ**こよと五十音圖の**イ・ウ・オ**の三段に活用するものを**カ行變格活用**の動詞といふ。  
 カ行變格活用に屬する動詞は**來**の一語だけである。  
 ○カ行變格活用の動詞は口語でもカ行變格活用であるが、終止形と命令形とが文語の活用と異なる。

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
(來)	こ	き	くる	くる	くれ	こい

サ行變格活用

セサ行變格活用

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(爲)	せ	し	す	する	すれ	せよ
エ段		イ段			ウ	
					段	
					エ段	

右の例のやうに、**せしすするすれせよ**と五十音圖の**イ・ウ・エ**の三段

に活用するものを**サ行變格活用**の動詞といふ。  
 サ行變格活用に屬する動詞は**爲**の一語だけである。

○爲は名詞形容詞または副詞と結びついて、やはりサ行變格活用の動詞となることが多い。

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
心	こころ	こころ	こころ	こころ	こころ	こころ
勉強	べんきやう	べんきやう	べんきやう	べんきやう	べんきやう	べんきやう
全	まこと	まこと	まこと	まこと	まこと	まこと
明	あきらかに	あきらかに	あきらかに	あきらかに	あきらかに	あきらかに
信	しん	しん	しん	しん	しん	しん
重	おも	おも	おも	おも	おも	おも
先	まへ	まへ	まへ	まへ	まへ	まへ
に						
す						
心	こころ	こころ	こころ	こころ	こころ	こころ
勉強	べんきやう	べんきやう	べんきやう	べんきやう	べんきやう	べんきやう
全	まこと	まこと	まこと	まこと	まこと	まこと
明	あきらかに	あきらかに	あきらかに	あきらかに	あきらかに	あきらかに
信	しん	しん	しん	しん	しん	しん
重	おも	おも	おも	おも	おも	おも
先	まへ	まへ	まへ	まへ	まへ	まへ
に						
す						
せ						
し						
す						
する						
すれ						
せよ						

○サ行變格活用の動詞は口語でもサ行變格活用であるが、未然形と終止形と命令形とが文語の活用と異なる。



語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
(爲)	し <sup>〇</sup> せ	し	する <sup>〇</sup>	する	すれ	し <sup>〇</sup> せよ <sup>〇</sup>

○「勉強しよう」「明かにしよう」など口語ナ行變格活用の未然形が未來又は推量の助動詞ようにつゞく時にはしようであるが「使命を完うして歸るでせう」「仰に従ひませう」のでせうませうは、指定の助動詞です尊敬の助動詞ますの未然形に未來又は推量の助動詞うの添うたものであるから、紛れないやうにしなければならぬ。

● ナ行變格活用

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
ア段	イ段	ウ	エ段	エ段		

右の例のやうに、**な**に**ぬ**ぬる**ぬれ**ねと五十音圖の**ア**・**イ**・**ウ**・**エ**の四段

● ナ行變格活用

に活用し、連體形と已然形とが四段活用と異なるものを**ナ行變格活用**の動詞といふ。  
ナ行變格活用に屬する動詞は**死ぬ**・**往ぬ**の二語だけである。

○ナ行變格活用の動詞は、口語では四段活用となる。

● ラ行變格活用

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
有	ら	り	り	る	れ	れ
ア段	イ	段	ウ段	エ	段	

右の例のやうに、**ら**り**り**る**れ**れと五十音圖の**ア**・**イ**・**ウ**・**エ**の四段に活用し、終止形が四段活用と異なるものを**ラ行變格活用**の動詞といふ。

ラ行變格活用に屬する動詞は**有り**・**居り**・**侍り**の三語だけである。

○ラ行變格活用の動詞は、口語では四段活用となる。  
次に文語動詞と口語動詞との活用を比較して掲げる。

文語動詞 (九種)		口語動詞 (五種)	
四段活用	ラ行變格活用 ナ行變格活用	四段活用	
上一段活用	上一段活用 上二段活用	上一段活用	
下一段活用	下一段活用 下二段活用	下一段活用	
カ行變格活用	カ行變格活用	カ行變格活用	
サ行變格活用	サ行變格活用	サ行變格活用	

三 文語動詞の活用の種類の見分け方

まづ上一段活用、下一段活用及び變格活用に屬する語は、その數

が少いからすべて記憶する。

上一段活用

着る 煮る 似る 乾る 籤る 見る 射る

鑄る 居る 率る 用る

下一段活用

蹴る

カ行變格活用

來

サ行變格活用

爲

ナ行變格活用

死ぬ

ラ行變格活用

有り

次に、その動詞に「ず」又は「ん」を連ねて見て、

(一) ア段から続くものは四段活用

〔例〕 聞か(ア)ず。 學ば(ア)ん。

(二) イ段から続くものは上二段活用

〔例〕 起き(イ)ず。 悔い(イ)ん。

(三) エ段から続くものは下二段活用

〔例〕 受け(エ)す。 棄て(エ)ん。

○口語動詞の活用を見分けるには、まづ語数の少ないものは記憶する。

カ行變格活用 來る。

サ行變格活用 爲る。

次に、その動詞にない又はぬを連ねて見て、

(一) ア段から続くものは四段活用

〔例〕 聞か(ア)ない。 學ば(ア)ぬ。

(二) イ段から続くものは上一段活用

〔例〕 起き(イ)ない。 悔い(イ)ぬ。

(三) エ段から続くものは下一段活用

〔例〕 受け(エ)ない。 棄て(エ)ぬ。

練習

(一) 次の動詞の活用を述べなさい。

〔例〕 濟す 正しうす

幹	未	用	終	體	已	命
濟	さ	し	す	す	せ	せ
正しう	せ	し	す	する	すれ	せよ

サ四

サ變

(二) 次の文から動詞を選び出し、その活用の種類を述べなさい。

顧みる 變ず 往ぬ 着る 怖づ 遂ぐ 有り  
煮る 感動す 蹴る 枯る 押す 持つ 集る

〔例〕 ひとり燈火のもとにふみをひろげて見ぬ世の人を友

とするサ變こそこよなうなぐさむマ四わざなれ。

一 眼を閉ぢて遠く古を顧みれば、綿々の情盡マ四くることなし。

二 思ひてこゝに至れば、青年よろしく努力すべきなり。

三 溪に沿ひて進めば、山高く聳え、水清く流れて、塵外の趣あり。 枝に

三 囀る鳥も、花にたはむる蝶も、春を欣ぶものの如く、日毎の旅人を  
 して峠越す勞を一掃せしめ、足の疲るるを覺えざらしむ。  
 四 うめが枝に来るる鶯はるかけて鳴けどもいまだ雪は降りつつ。  
 五 遠い山々へはまだ雪の來ることがあり、雨でも降れば裕では寒い  
 こともある。(口)

六 敵の兵士は一方に血路を求めて、逃げようとした。(口)

四 語尾の紛れ易い文語動詞

- 一 買ひて。 老いて。 率ゐて。
- 二 買ふ。 据う。 報ゆ。
- 三 堪へず。 生ゑず。 植ゑず。
- 四 閉づ。 交ず。

右の例のやうに、動詞の語尾には、發音が同じやうで假名の違ふの

がある。今これを五十音圖の各行にあてると次のやうな關係に  
 なる。

ダ行	ザ行	ワ行	ヤ行	ハ行	ア行
だ	ざ	わ	や	は	あ
ぢ	じ	ゐ	い	ひ	い
づ	ず	う	ゆ	ふ	う
で	ぜ	ゑ	え	へ	え
ど	ぞ	を	よ	ほ	お

○ア行・ヤ行・ワ行に活用する動詞

右に挙げたものの外は、大抵ハ行に活用する動詞である。  
● ザ行に活用する動詞

ワ行		ヤ行				ア行					
下二段	上一段	下二段				上一段	下二段				
植う。	居る。	悶 <small>も</small> ゆ。	見 <small>み</small> ゆ。	映 <small>は</small> ゆ。	費 <small>は</small> ゆ。	榮 <small>は</small> ゆ。	消 <small>く</small> ゆ。	甘 <small>あま</small> ゆ。	老 <small>お</small> ゆ。	射 <small>う</small> る。	得 <small>う</small> 。
飢う。	率 <small>ひき</small> る。	見 <small>み</small> ゆ。	冷 <small>ひや</small> ゆ。	潰 <small>つぶ</small> ゆ。	牙 <small>き</small> ゆ。	肥 <small>こ</small> ゆ。	癒 <small>い</small> ゆ。	悔 <small>く</small> ゆ。	報 <small>く</small> ゆ。	鑄 <small>く</small> る。	
据う。	用 <small>もち</small> る。	燃 <small>も</small> ゆ。	殖 <small>は</small> ゆ。	煮 <small>に</small> ゆ。	聳 <small>たか</small> ゆ。	越 <small>こ</small> ゆ。	覺 <small>おぼ</small> ゆ。				
		萌 <small>も</small> ゆ。	吼 <small>こ</small> ゆ。	生 <small>は</small> ゆ。	絶 <small>た</small> ゆ。	凍 <small>こ</small> ゆ。	聞 <small>き</small> ゆ。				
ゑ	ゐ	え				い	い	え			

右に挙げたもの、外は、ダ行に活用する動詞である。

○以上はすべて文語動詞について述べたのであるが、口語動詞もこれによつて類推することが出来る。例へば文語の覺おぼゆがヤ行下二段であることがわかれば、口語では下二段であるから覺おぼえるとなり、文語の据たかゆがワ行下二段であることがわかれば、口語では下二段であるから、据たかゑるとなることがわかる。

練習

(一) 次の動詞の文語活用形を平假名で、口語活用形を片假名で記しなさい。

例 植 得

ザ行	行
サ行變格	活用名
論ず。	下二段
感ず。	交 <small>ま</small> ず。
重 <small>おも</small> んず……など	語 (終止形)
じ	ぜ (連用形)

得		植		幹	
口	文	口	文	口	文語
エ	え	エ	ゑ	未	
エ	え	エ	ゑ	用	
エル	う	エル	う	終	
エル	うる	エル	うる	體	
エレ	うれ	エレ	うれ	假	巳
エヨ	えよ	エヨ	ゑよ		命

論 酬 卒 榮 肯 詣 添 愧  
 綻 貫 超 葬 倒 候

(二)

次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正しなさい。

- 一 飢へ且凍へたる者は、衣食を選ぶに違あらず。  
 〔例〕 老ひて後若き日の怠惰を悔みて徒に死ぬものすくな  
 からざるは眞に寒心に堪えざるなり。  
 二 月霜の如く牙へ、木枯海の如く空に吼ふる夜は、人籟すべて絶へて  
 直に至上の聲を聞く心地す。  
 三 人如何に笑うとも、自ら守るところ堅く、行道に違わざらむには、何  
 の恥する事かこれあらん。  
 四 教ゆれども覺へず。  
 五 反省することを解す者は、事に觸れる毎にその智進み、然らざる者  
 は生來才智ありとも、終に小才子となり果つべし。  
 六 さうなればかうしやうと考える。  
 七 手紙を書こうと思う。  
 八 悪が榮へ善が衰えるやうな社會であつてはならない。正義と人  
 道とが絶へず人々の反省を促し、善いもの正しいものが常に幸福  
 であるやうな社會でありたい。悔ひることなく恥じることなき  
 生活は聖人より外にあり得るとは思えぬ。故に先づ人々の反省  
 悔過ということから善い社會は生れて來るのだ。

第三章 形容詞附形容動詞

形容詞の活用

一 文語形容詞の活用

種類	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
ク活用	善	く	く	く	き	けれ
シク活用	美	しく	しく	し	しき	しけれ

○シク活用の終止形を「悪しし」「勇ましし」などのやうに用ひる習慣のあるものは、しを重ねてもよい。

○形容詞の連用形は、「山高く聳ゆ」「雨烈しく降る」のやうに副詞の用をなすことが多い。又、「夏は暑く」「冬は寒し」のやうに語句を中止し、「遠くへ旅立つ」のやうにそのまゝで名詞となることもある。

○形容詞の連體形は、「善きを取り、悪しきを捨つ」のやうに、下に來る體

言を省略することがある。

○ク活用に屬するものの中には、「静けし」「明けし」「さやけし」「のどけし」のやうに、已然形を缺いてゐるものがある。

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
静け	く	く	し	き	○

○口語形容詞は次のやうに活用する。

語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形
善	い	く	い	い	けれ
美し		しく	しい	しい	しけれ

○口語形容詞の連用形が副詞の用をなす場合に、關西では「大變暑うなつた」「早うお歸り」のやうに長音を<sup>レ</sup>用ひるが、關東ではもとのまゝ「暑く早く」を用ひる。關東の用ひ方によるがよい。但し、關東でも「ございます」につゞく場合は、「大變暑うございます」「お早うございます」。

のやうに長音うを用ひる。

練習

次の文から形容詞を選び出し、その活用形を述べなさい。

〔例〕 蟻は明暮にいそがしく、世の營に隙なき人に似たり。

一 品物多くして、之を望む者少ければ、其の物の價安くなり、品物少くして之を望む者多ければ、其の物の價高くなる。

二 何となく物うれしくもあるものは、起きいづる朝の心なりけり。

三 天高くして鳥の飛ぶに任せ、海闊くして魚の躍るに従ふ。

四 庭に敷きつめたむしろの上に、黄色い麥の穂が一面に廣げられて、まぶしいやうな夏の日にかざやいてゐる。(口)

二 文語形容動詞の活用

善 明かに。 洋々と。	あり	善 明かな 洋々た	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
				ら	り	り	る	れ	れ

右の例のやうに、形容詞の連用形と、にまたはとで終る副詞とは、動詞ありに結びついてラ行變格活用の動詞と同様に活用する。これらの語は意味は形容詞的であり、活用は動詞的である所から、これを形容動詞と名づけ、形容詞の一種とする。

○形容動詞が語句の中止をあらはす場合は、次の例のやうにありを省略することが多い。

月明かに(して)星稀なり。  
歩武堂々と(して)進軍せり。

○口語形容動詞は、



今日の會合の出席者は定めし多からうと思つてゐたのに、案外少かつた。

風は静かで、波は穏かです。

のやうに用ひられるが、完全な活用形はない。

練習

次の文から形容詞と形容動詞とを選び出して、その活用形を述べなさい。

〔例〕

形動、連用  
憂かりしこともつらかりしことも、時を過ぎてはたゞなつかしき思ひ出として残るのみ。  
シク活、連體

一 源實朝、故大將の跡をうけつぎて、つかさ位滞る事なく、よろづ心のままなり。建保元年二月廿七日正二位せしは、閑院の内裏つくれる賞とぞ聞き侍りし。同じき六年權大納言になりて左大將をかねたり。左馬のかみをさへぞつけられける。その年やがて内大

臣になりても、なほ大將もとのままなり。父にもやや立ちまさりていみじかりき。この大臣は大方心ばえもうるはしく、猛くもやさしくもよろづめやすければ、ことわりにも過ぎて武士の靡き従ふさまも父にも越えたり。

二 田の面は水の廣々と、蛙の聲もにぎはしく、谷あひの家窓明けて、夜に親しむ時は來ぬ。

三 のどかな春になつた。そぞろあるきもさぞ楽しからう。(口)

第四章 音 便

つきたち — ついたち。(月立朔)

さきはひ — さいはひ。(幸)

やうやく — やうやう。(漸)

つかへまつる — つからまつる。(仕)

音便

右の例のやうに、或音が發音の便宜によつて他の音に轉じるために、それをあらはす假名も變ることを音便といふ。

音便にはイ音便・ウ音便・撥音便・促音便の四種がある。動詞にはこの四種の音便があり、形容詞にはイ音便・ウ音便の二種がある。

イ音便

●イ音便 きぎがいに變るもの。

聞きて ——— 一を聞いて十を知る。

動詞

仰ぎて ——— 天を仰いで歎ず。

善き ——— 善いかな、言や。

形容詞

悲しき ——— あゝ、悲しいかな。

○右の外、口語で、「ござります」「下さりませ」「ございませ」「下さいませ」といふやうな例もある。

ウ音便

●ウ音便 ひくがうに變るもの。

○イ音便のいを聞ひて「仰る」などと書き誤つてはならぬ。

儼ひて ——— 筏を儼うて筑水を下る。

動詞

争ひて ——— 先を争うて走る。

短く ——— 髪を短く刈る。

形容詞

空しく ——— 志を空しうするなかれ。

○形容詞の連用形がサ行變格活用の動詞すに結びついた「全くす」「正しくす」「使命を全うす」「己を正しうして人を正す」といふやうにウ音便となる。

○ウ音便のうを儼ふて「争ふて」などと書き誤つてはならぬ。

○副詞のかく「斯もウ音便に變つて」「かういふ事があつた」などといふ。

○これを「かういふ事」「かふいふ事」などと書き誤つてはならぬ。

●撥音便 みびにが撥ねる音のんに變るもの。

踏みて ——— 夕に月を踏んで歸る。

撥音便

促音便

飛びて——飛んで火に入る夏の蟲。  
死にて——死んで護國の鬼となる。

○撥音便のんを踏むで「飛むで」「死むで」などと書き誤つてはならぬ。

④ 促音便

ちりひが促る音のつに變るもの。

勝ちて——勝つて兜の緒を締めよ。

有りて——命有つての物種。

誓ひて——誓つて君恩に報い奉らん。

練習

(一) 次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正しなさい。

〔例〕

水を飲むで源を思ふは人情なり。

- 一 一刻も早く平原を見ようとあせりながら辛ふじて山を越へた。(口)
- 二 松葉が一面に浮むで水を蔽ふてゐるので、一寸池がある様に見へ

ない。(口)

三 先輩を問ふて教を乞う。(口)

四 養うた上に敬うことが大事だ。(口)

五 仰るで天にはおび、俯して人にはじす。

六 悲しむたり、喜むたり、泣ひたり、笑ふたりするのは、浮世の常であるう。(口)

七 淵に臨むで魚を羨むは、退ひて網を結ぶに如かず。

八 弓を射らむとせば、先づ姿勢を正しふすべし。

九 よく人を教えしかば、就ひて學ぶもの常に絶へざりき。

二 新年おめでとうござります。昨年中はいろくくと御厚意を辱ふし、御禮は筆にも言葉にも盡し得ましやうか。何卒本年も相かわらす御眷顧を賜わる様偏に願ひあげます。(口)

(二) 口語で「本をかつて来た」といふ時のかつては地方によつてその意味がちがふやうです。それを文法上から説明しなさい。

第五章 助動詞

一 文語助動詞の種類と活用

受身の助動詞

● 受身の助動詞

猫、犬に追はる。

鼠、猫に捕へらる。

右の例のる・らるのやうに、他から或動作を仕向けられる意をあらはすものを受身の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ
らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ

るは四段・ラ變・ナ變の未然形につゞき、らるはその他の動詞の未然形につゞく。(附表参照、以下同じ)

○らるがサ行變格の動詞、例へば罪すに結びついて罪せらるといふべき場合に、現代文では罪さるとすることもある。

○口語の受身の助動詞は、れる・られるの二語で、その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ
られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られよ

動詞につゞく方法は、文語に準じて類推することが出来る。以下同じ。

可能の助動詞

● 可能の助動詞

十里の道を一日にて歩まる。  
我にもこれ位の數はかぞへらる。

右の例のるらるのやうに、そのものゝ力で或動作をすることの出来る意をあらはすものを**可能の助動詞**といふ。その活用は受身のるらると同じく、動詞につゞく方法も同様であるが、たゞ命令形がない。

○口語の**可能の助動詞**も**れるられる**の二語である。

○**可能の助動詞**は、

子の行末思はる。

故郷の事のみ思ひ出でらる。

のやうに、動作が自然に起つて止められぬ意をあらはすことがある。

● **使役の助動詞**

騎兵、馬を走らす。

主人、下男に木を植ゑさす。

使役の助動詞

人をして低回去る能はざらしむ。

右の例の**すさすしむ**のやうに、或動作を他のものにさせる意をあらはすものを**使役の助動詞**といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ

すは四段ナ變ラ變の未然形に、さすはその他の動詞の未然形にしむはすべての動詞の未然形につゞく。

○さすがサ行變格の動詞、例へば**賣買す**に結びついて**賣買せさす**といふべき場合に、現代文では**賣買さす**とすることもある。

○しむが下二段の動詞得に結びついて**得しむ**といふべき場合に、現代

文では得せしむとすることもある。  
○口語の使役の助動詞はせるとさせるの二語で、その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ

尊敬の助動詞

④ 尊敬の助動詞

父は讀書を好まる。  
先生は本日缺席せらる。  
殿下は和歌を好ませらる。  
皇后陛下には葉山に行啓せさせ給ふ。  
主上ひそかに笠置山に行幸せしめ給ふ。

右のる・らる・せ・すの未然形・させ・さすの連用形・しめ・しむの連用形のやうに他の動作を敬ふ意をあらはすものを尊敬の助動詞といふ。  
る・らるの活用は受身の助動詞のる・らるの活用と同じくす・さす・しむの活用は使役の助動詞のす・さす・しむの活用と同じであり、動詞からつゞく方法も同様である。

- せ・させ・しめは、通常らる・給ふと結びつけて用ひられる。
- 口語ではれる・られるを用ひるが、これには命令形はない。
- 以上述べた文語のる・らる・せ・させ・しめ、口語のれる・られるの外に、

陛下、大阪へ行幸し給ふ。  
朝早くお起きなさる。  
夜おそくおやすみあそばす。  
右の例の給ふやなさるやあそばすなどは、もと尊敬の意をあらはす動詞であるが、轉じて尊敬の助動詞として用ひられる。  
謹みて新年を賀し奉る。

明日午前中に参上いたします。  
内々でお話しまうすことがある。

右の例の奉るやいたすまうすなどは、もと自分の動作を謙遜していふ動詞であるが、轉じて尊敬の助動詞として用ひる。

われもまたかく思ひ侍り。

本日出發仕り候。

あなたもお読みになりますか。

右の例の侍り候は、もと高貴の人に對し、自分の動作を卑下して鄭重にいふ動詞であるが、轉じて尊敬の助動詞として用ひられる。この場合に口語ではますを用ひる。ますの活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
ます	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ

練習

(一) 次の文から受身可能使役尊敬の助動詞を選び出し、その種類と活用形とを述べなさい。

〔例〕 歩かうと思へば歩かれない可能、未然こともなかつたが、つれの

者に勧められて、とうく自動車で来た。受身、連用 (口)

一 五十人の兵は行くく百姓をつのり、かざり火をたかせ、糧食の用意をなさしむ。使役、連用

二 明けの年の秋、また國に往きたまひ、あとにて課を立てられて、目のうちには行草の字三千、夜に入りて一千字をかざりて書き出すべしと命ぜられたり。

三 徳川殿、さらば醫師召させよとて、これを召させらる。

四 御手紙拜見致候。二人ともよく勉強し居らる、由、安心致候。

時の助動詞

(イ) 完了の助動詞

- 五 月見れば末の代までもしのばれて見ぬ古のいとゞゆかしき。
  - 六 今にきつと立派な方におなりなさるでございませう。(口)
- (二) 助動詞るるの示すすべての意義を例を擧げて説明しなさい。

⑤ 時の助動詞

(イ) 完了の助動詞

櫻かざして今日もくらしつ。  
 塵づかに朝顔咲きぬ暮の秋。  
 船は沖に向ひて港を出てたり。  
 人々皆歸り去れり。

右の例のつぬたりりのやうに、或動作が完全に成立した意をあらはすものを完了の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	つ	ぬ	たり	り
未然形	(て)	な	たら	(ら)
連用形	て	に	たり	(り)
終止形	つ	ぬ	たり	り
連體形	つる	ぬる	たる	る
已然形	つれ	ぬれ	たれ	(れ)
命令形	(てよ)	ね	○	○

括弧を施したものは現代文では殆ど用ひない。以下同じ。

つぬたりはすべての動詞の連用形に、りは四段の已然形とサ變の未然形とにつづく。但し、ぬはナ變にはつゞかない。

○口語の完了の助動詞はたで、その活用は次のやうである。

語	た
未然形	たら
連用形	たり
終止形	た
連體形	た
假定形	たら
命令形	



○たりりは次のやうに動作の繼續進行又は状態をあらはすことがある。

春の水淺葱あさぎに流れたり。

我が宿に大雪降り。

霜一面に置けり。

○現在の時は、別に助動詞を用ひないで動詞そのまゝであらはす。

(口)過去の助動詞

(口)過去の助動詞

昔一人の翁おきなありき。

野山にまじりて竹をとりつゝよろづの事に使ひけり。

右の例のきけりのやうに、或動作が今よりも前に起つた意をあらはすものを過去の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
き	(せ)	○	き	し	しか	○
けり	(けら)	○	けり	ける	けれ	○

○右の表に示したやうに、きは特種の活用をする助動詞で、

公は少しも動ずる色なく、自若としてその座を守り給ひきとぞ、  
内の人の物語りし。

はかなく露と消えしかど、其の名はくちせず、諸葛孔明。  
といふやうに用ひられる。

○終止形きを用ひる場合に、現代文では、

火災は二時間の長きに亘りて鎮火せざりし。  
のやうにしを用ひることもある。

きけりはすべての動詞の連用形につづく。但し、きは力變とサ變

につづく場合に限つて、次の表のやうな例外がある。

活用	未然形	連用形
カ 變	來 <sup>こ</sup> し しか	來 <sup>き</sup> し しか
サ 變	爲 <sup>む</sup> し しか	爲 <sup>む</sup> き

特例

來<sup>こ</sup>し 來<sup>き</sup>し  
 來<sup>き</sup>し 來<sup>こ</sup>し  
 方行く末を思ふ。急ぎ  
 ど及ばざりき。

天神山に遠足をせし事あり。

昨日訪はんとせしかど差支ありて果さざりき。

拂曉を期して敵を襲撃せんとしき。

○サ行四段活用の助動詞を「し」かにつゞけて、「暮しし」「時」「盡しし」かば「な  
 どいふべき場合を「暮せし」「時」「盡せし」かば「などいふこともある。

○口語の過去の助動詞は、口語の完了の助動詞「た」と同じである。

(ハ) 未來の助動詞

むはんと書き、んと發音する。

(ハ) 未來の助動詞

山雨まさに到らむとして風樓に滿つ。

右の例のむのやうに、或動作が今よりも後に起る意をあらはすものを未來の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
む	○	○	む	む	め	○

むはすべての動詞の未然形につづく。

○口語の未來の助動詞は「うよう」で、四段活用の動詞には「うがつき」、その他の動詞には「うがつく」。

明日は雨が降らう。

やがて日も暮れよう。

うようは活用しない。

過去完了

○ようをやうと混同してはならぬ。

かういふ事は覚えておくやうに注意しよう。

やうは様の字音で、ようは未來の助動詞である。

○完了の助動詞つぬたりりに過去の助動詞きけりを重ねて、動作が過去に完了したことをあらはす。

(一) 花散り

てき。てけり。

(二) 花散り

にき。にけり。

(三) 花散り

たりき。たりけり。

(四) 花散れ

りき。りけり。

右のうち(三)の外は現代文ではあまり用ひられない。

未來完了

○又つぬたりりに未來の助動詞むを重ねて動作が未來に完了することをあらはす。

(一) 花散り

てむ。

(二) 花散り

なむ。

(三) 花散り

たらむ。

(四) 花散れ

らむ。

右のうち(三)が過去の推量として用ひられる外は現代文ではあまり用ひられない。

○つぬにべしがつまいて「つべし」「ぬべし」となった場合は、つぬは完了の意が全く失はれて、單に意味を強めていふだけである。

練習

(一) 次の文から時の助動詞を選び出し、その種類と活用形とを述べなさい。

〔例〕松山の浪に流れて來し船のやがてむなしくなりけるかな。

過去、連體

過去完了、連體

- 一 靜かに思へば、よろづに過ぎにし方の戀しさのみぞせむ方なき。
  - 二 先に晝がきたる檜、何となく物足らぬ所ありて氣にかゝりしが、東國へ下る路すがら、箱根山中にてよき枝ぶりの檜を見て、其の意を得たれば、かき添へんために歸りしなり。
  - 三 故郷にたま／＼來つる我を見て、こぼれかゝれる庭の白露。
  - 四 花にあかぬ歎はいつもせしかども、今日のこよひに似る時はなし。
  - 五 君のため世のため何か惜しからむ、すてゝかひある命なりせば。
- (二) 次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正しなさい。

- 〔例〕 仰の趣申せしに、それにてよしと仰せられし。
- 一 市街の中央に大砲を据へて打出せしかば、諸軍勢に乗じて進みし。
  - 二 余は久しく病床に呻吟せしが、母の心を盡せし甲斐ありて、さしも重かりき病氣もやう／＼癒へて歩行に堪ゆるに至れり。
  - 三 こんな靜かな部屋に居り、これほど本を持つてゐながら、積むでおくだけで、讀むのみやうといふ氣はないやうです。(口)

推量の助動詞

- (三) 學ぶの六つの時、現在完了、過去過去完了、未來未來完了を示しなさい。
- (四) 次に掲げたもののうち、誤があれば訂正しなさい。

〔例〕 受けり。 迎へり。 這へり。 勉めり。 讀めり。 集めり。 射れり。 命ぜり。

推量の助動詞

- さる事もあらむ。
- しづ心なく花の散るらむ。
- 何時の頃にかありけむ。
- 程なく花も咲くべし。
- 思ふ事なくてぞ見まし。
- み山には霞ふるらし。
- 紅葉亂れて流るめり。

右の例の、むらむけむべしましらしめりのやうに物事を推し量つ

ていふ意をあらはすものを推量の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
む	○	○	む	む	め	○
らむ	○	○	らむ	らむ	らめ	○
けむ	○	○	けむ	けむ	けめ	○
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	○
まし	(ませ)	○	まし	まし	ましか	○
らし	○	○	らし	(らし)	(らし)	○
めり	○	(めり)	めり	める	めれ	○

む・ましはすべての動詞の未然形に、けむは連用形に、らむべしらし・めりは終止形につく。但し、らむべし・らし・めりはラ變からは連體形につく。よつて終止形に助動詞はラ變から連體形に

○べしは推量の外に、可能當然決意命令などの意をあらはすこともある。

- (一) 風起らば雨やむべし。(やむだらう) 推量
- (二) 三尺の秋水鐵をも斷つべし。(斷つことが出来る) 可能
- (三) 油盡くれば火は消ゆべし。(消えねばならぬ) 當然
- (四) 必ず參上仕るべし。(參上仕らう) 決意
- (五) 講堂に參集すべし。(參集しなさい) 命令

○べしは、又ラ變のありと結びついて、べからべかりとして用ひられる。危険なる場所に近づくべからず。

もし援兵の來ることなくば全滅すべかりしなり。

○口語の推量の助動詞にはうようらしいなどがある。

打消の助動詞

⑦ 打消の助動詞

歲月は人を待たず。  
 かゝる事ありとも知らざりき。  
 必ず人手にはかゝり申すまじ。  
 君はまだ遠くは行かじ。

右の例のずざりまじのやうに或動作を打消す意をあらはすものを打消の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	○
ざり	ざら	ざり	(ざり)	ざる	ざれ	ざれ
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○
じ	○	○	じ	(じ)	(じ)	○

ずざりはすべての動詞の未然形につゞき、まじは終止形につゞく。但し、まじはラ變からは連體形につゞく。

○口語の打消の助動詞にはぬないまいなどがある。

練習

(一) 次の文から推量の助動詞と打消の助動詞とを選び出し、その活用形を述べなさい。

[例] 急がずばぬれざらましを旅人の後よりはるゝ野路の

むらさめ。

- 一 夢さめぬ真柴やからん山の井の曉ふかき水やくままし。
- 二 春來ぬと人はいへども鶯の鳴かぬかぎりはあらじとぞ思ふ。
- 三 春立つと聞きつるからに春日山消えあへぬ雪の花と見ゆめり。
- 四 雉子も鳴かすば打たれまい。(口)

指定の助動詞

(二) 次の動詞に文語ではまじ、口語ではまいをつけなさい。

(文語) 降る 見る 蹴る 來 爲

(口語) 降る 見る 蹴る 來る 爲る

(三) 次の四つの文の中でどれが正しいかを説明しなさい。

イ 品物に手を觸れべからず。

ロ 品物に手を觸るるべからず。

ハ 品物に手を觸れるべからず。

ニ 品物に手を觸るべからず。

● 指定の助動詞

中庸は徳の至れるものなり。

かの紅きは紅葉の流るゝなり。

孔子は聖人たり。

右の例のなり・たりのやうに、物事を指し定める意をあらはすものを指定の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

詠歎の助動詞

なりたりは體言につづく。但しなりは用言の連體形にもつづく。

○ 指定の助動詞のなり・たりの體言についたものは形容動詞の靜かなり「燦然たり」とまぎれ易く又指定の助動詞のたりと完了の助動詞のたりとは形は同じであるが、意味は全くちがふ。

○ 口語の指定の助動詞にはだてすであるがある。

● 詠歎の助動詞

摘みのこす桑の林に風立ちて夕立すなり、富岡のさと。ほけり夕暮。

心なき身にもあはれは知られけり、鳴たつ澤の秋の夕暮。

右の例のなり・けりのやうに詠歎の意をあらはすものを詠歎の助

語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
なり	○	○	なり	なる	なれ	○
けり	○	○	けり	ける	けれ	○

詠歎のなりは用言の終止形につゞくが、指定のなりは用言の連體形または體言につゞく。

詠歎のけりと過去のけりとは、ともに用言の連用形につづいて用法に區別がないから、専ら文全體の意味から考へて區別しなければならぬ。

㊦ 希望の助動詞

外つ國のこと見たし聞きたし。

花の春もみぢの秋のさかづきも、ほどく／＼にこそくままほ

希望の助動詞

しけれ。

右の例のたしまほしけれのやうに、或動作を希望する意をあらはすものを希望の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
たし	たく	たく	たし	たき	たけれ	○
まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ	○

たしはすべての動詞の連用形に、まほしは未然形につゞく。

○口語の希望の助動詞にはたいがある。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
たい	○	たく	たい	たい	たけれ	○

比較の助動詞

㊧ 比較の助動詞



落花は雪の降るごとし。  
光陰矢の如く、月日は流るゝが如し。

右の例の如しのやうに、物事を比較する意をあらはすものを比較の助動詞といふ。その活用は次のやうである。

語	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	○	○

ごとしはすべての動詞の連體形につゞく。また、その連體形との間に助動詞をはさむことが多い。體言につゞく時は助動詞をはさむ。

○口語の比較の助動詞にはやうだ、やうですががある。

但し、やうだ、やうですは

誰か来るやうだ。誰か来るやうです。

のやうに推量の意に用ひられることもある。

練習

(一) 次の文から助動詞を選び出し、その種類と活用形とを述べなさい。

〔例〕 男も爲すなる日記といふものを、女もして試みむとて爲なるなり。

- 一 國を思ひ寝られぬ夜の霜の色ともしび寄せて見る劍かな。
- 二 若水をくむ車井のおとすなり今こそ春もめぐりきぬらし。
- 三 貌を正すは心を正すことなり。氣高く美しき姿をとれる時は、心自ら氣高く美しくなるべし。貌を亂し姿を崩す時は、心も自ら亂れ来る。古人が禮を重んじたるは、この理を知り居たればなりき。
- 四 かねても屢々申しし如く、お家の大仇は彼等にあらす、鼠輩の爲に命を落すは、大忠臣の所爲にはあらず。
- 五 いやいや、おかへし申したら、舞はずに空へお上りになりませう。(口)

(二) 次の文に中古文の法則に合はぬところや誤があれば、その理由を述べて訂正しなさい。

〔例〕 或法律家のしるせしに、罪人の譴責さるることを人に見せしむるは悪ししと覺ゆなりとありし。

具上、連用

シ(シク活、終止)

ゆる(下二、連體)

き(過去、終止)

あゝあゝのうらやま

あ

- 一 人の好意を無にするべからず。人の親切を忘るべからず。
- 二 若しすこしにても心をゆるめなば、忽ち他にまどはせられて、多年の苦心は水の泡と消え失せぬ。
- 三 かふゆう過を犯そうとは思はなかつた。これから再びくり返さないように氣をつけやう。(口)
- 四 明朝早くぎられるならおいでなさい。いつしよにあの山を越へましやう。(口)

二 助動詞の用法

助動詞が動詞につづくに一定の法則のあることは既に述べた通

りであるが、形容詞または形容動詞が助動詞につづくのにも、助動詞が助動詞につづくのにも、その法則は變らない。

走るは行くの早きなり。

ク活、連體 指定、終止

夜はいと静かなりき。

形動、連用 過去、終止

此の兒文才あり、いかにも師を擇びて學ばしめらるべし。

ハ四、未然

使役、未然

尊敬、終止

先生は随分勉強せられ

サ變、未然 尊敬、連用

た

完了、終止 推量、終止

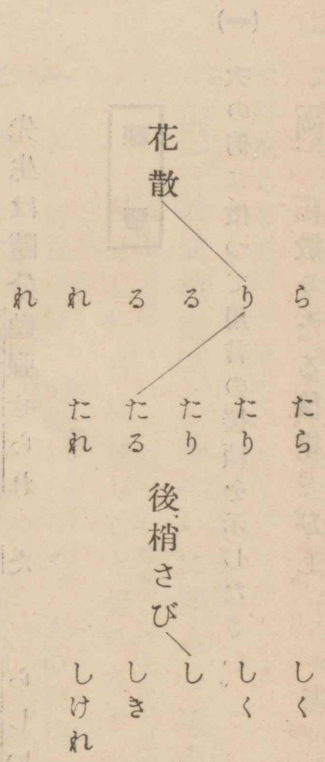
らしい。

(口)

練習

(一) 次の例に倣つて用言の接續を示しなさい。

〔例〕 花散りたる後、梢さびし。



〔注意〕 排列の順序は未然連用終止連體已然命令とする。

- 一 偉人は人を心服せしむべき魔力を有せり。
- 二 面白く遊ばんと欲せば、よく勉強したる後ならざるべからず。
- 三 夜の美感をたたふるにふさはしき言葉は、この世に幾何もあらざらむ。
- 四 荒れにけりあはれいく世の宿なれや住みけむ人のおとづれもせぬ。

(二) 次の文から動詞・形容詞・形容動詞・助動詞を選び出し、その種類と活用形

とを述べなさい。

〔例〕 おぼしき事シク活、連體いはぬハ四、未然は腹打消、連體ふくるラ下二、連體ゝわざなり指定、終止

- 一 過ぎ來し方を顧みれば、たゞ一夜の夢の心地せらるれど、またつくづくと思ひ續くれば、いと遙けくぞ覺ゆる。
- 二 秋來ぬと目にはさやかに見えねども、風の音にぞおどろかれぬる。
- 三 一木一草に至るまで歴史あらぬはなく、人をして低回去るを得ざらしむ。
- 四 昨夜はおそく寝ねたれど、今朝は早くも起き出でつ。
- 五 道路は足底の廣さだにあらば歩むべしといふは理のみなり。いかで歩むべからむ。梁の上を歩まば落ちぬべし。
- 六 やああま尼前で、秀秋が身に國辱はれむ罪覺えず。命あらむ限は、たゞもとのまゝにてこそあるべけれ。「速に首を刎ねらるべう候」と申せ、尼前。
- 七 高慢な兎は、のろい龜がどうして吾輩に追ひつかれようかと高を

くくつて、途中でちよつと晝寢をしました。(口)

第六章 副詞

一 人はいよく勇み馬はますくはやる。

二 嚴島は古より日本三景の一に數へられて殊に名高く、屋島・壇浦は源平の昔話に人の感興を動かすこと甚だ切なり。

右の例で、副詞「いよく・ますく」は動詞「勇み・はやる」の意味を限定し、殊には形容詞「名高く」の意味を限定してゐる。

三 いと遙かに見ゆ。

四 もつと靜かに歩め。(口)

右の例で、「いともつとは副詞遙かに靜かに」の意味を限定してゐる。

○副詞を重ねた場合には、この例のやうに上のが下の意味を限定することが多いが、又

彼は着實に熱心に研究す。

まだなか／＼寒い。(口)

のやうに、二つの副詞が共に下の意味を限定することもある。

五 わづかに一點の差で敵に勝をゆづつた。(口)

六 風景さながら繪の如し。

七 この成功は、要するに君の努力の結果である。(口)

右の例の(五)の「わづかに」は體言の意味を限定し、(六)の「さながら」は語句の意味を限定し、(七)の「要するに」は文の意味を限定してゐる。このやうに副詞はおもに動詞・形容詞・形容動詞の意味を限定し、時

としては他の副詞・體言・語句・文の意味を限定するものである。

○副詞は、意味を限定することばのすぐ上に來るのが普通であるが、時として、

辯士は悠然と演壇に上りて、徐に口を開きたり。

彼は遂に成功の域に達した。(口)

の悠然と・徐に・遂にのやうに、他の語句を隔てて限定することもある。

練習

(一) 次の文から副詞を選び出し、どの語の意味を限定してゐるかを述べなさい。

〔例〕あまり景色がよいので、漁夫はぼんやりと海を眺めてゐました。(口)

一 我は宋の臣なり。いづくんぞ二朝に仕へんや。願はくは我に死

をたまへ。

二 道端の切株に腰かけて、びたいの汗をふいてゐると、そよ／＼と吹

く風につれて、若葉のほひがひし／＼と身にせまつて來る。(口)

三 潮がすん／＼さがるので、舟はすすと進んで、たちまち海へ出た、

ばつと明るくなった。(口)

四 恐らくこのたそがれ時は、暮れさうで暮れない町の空氣の紫色と

共に、もつと／＼長くつゞくやうになるでせう。そして極短かつ

た冬の日とちやうど反對に一晝夜の大部を晝のやうに明るくし

てしまふでせう。(口)

(二) 副詞の定義を述べ、かつ簡単な例を示しなさい。

第七章 接續詞

一 松島・巖島及び天の橋立を日本三景といふ。

二 文を學び且武を習ふ。

右の例の及び且などは並列又は累加の意をあらはす接續詞である。

三 霞か雲かはた雪か。

四 あなたは参加しますか。それともやめますか。(口)

右の例のはたそれともなどは選擇の意をあらはす接續詞である。

五 諸車の通行を禁ず。但し郵便車はこの限にあらす。

六 日すでに暮れぬ。されど宿るべき所もなし。

右の例の但しされどなどは制限又は反戻の意をあらはす接續詞である。

七 われらが住む世界は其の形まるくして球の如し。故に

之を地球といふ。

八 求めよ然らば與へられん。

右の例の故に然らばなどは原因又は理由の意をあらはす接續詞である。

○書簡文に用ひられる間處段條なども接續詞に屬する。

○接續詞と副詞とは語の形が同じで紛れ易いものがある。

山また山を分けて行く。

接續詞

彼はまた失敗した。(口)

副詞

練習

次の文の傍線を施した語の品詞は何ですか。

イ 後便に又いろ／＼申しあげませう。(口)

ロ 家を思ひ且國を憂ふ。

ハ 彼が行ふところ或は人の誤解を招くやも知れず。

ニ 天然の美は更に人工の美よりもすぐれたり。

第八章 文語助詞の用法

文語助詞はその数が多く、用法もまた複雑である。今その中で特に注意すべきものゝ用法を述べよう。

一 ば

- 明日雨降らば遠足を中止せん。(イ)
- 今日雨降れば遠足を中止せり。(ロ)
- 水清くば泳がん。(イ)
- 水清ければ魚棲まず。(ロ)
- 風静かならば花散らざらん。(イ)
- 風静かなれば花散らず。(ロ)
- 知らずば言つて聞かせん。(イ)
- 知らねばこそ教を乞ひたるなれ。(ロ)

ばは右の例の(イ)のやうに用言の未然形に結びついて**假定**の条件をあらはし、(ロ)のやうに已然形に結びついて**確定**の条件をあらはす。

○口語では用言の假定形にばが結びついて假定の条件をあらはし、終止形に**ので**または**から**が結びついて確定の条件をあらはす。

明日雨が降れば遠足を中止しよう。

今日は雨が降る**ので**遠足を中止した。  
**から**

二 ともども

繪に書くとも筆も及ばじ。

浪荒くとも出帆せん。

出でて往なば主なき宿となりぬとも、軒端の梅よわれを忘るな。

ともども

右の例のやうに<sup>とも</sup>は動詞の終止形または形容詞の未然形に結びついて**假定**の條件をあらはす。(助動詞との結びつき方は動詞形容詞に準じて知ることが出来る)

繪に書け <sup>ど</sup> <sup>ども</sup> 筆も及ばず。

浪荒けれ <sup>ど</sup> <sup>ども</sup> 出帆せり。

天氣清朗なれ <sup>ど</sup> <sup>ども</sup> 波高し。

右の例のやうに、<sup>ど</sup><sup>ども</sup>は用言の已然形に結びついて**確定**の條件をあらはす。

○<sup>とも</sup>は口語では<sup>ても</sup>となつて用言の連用形に結びついて**假定**の條件をあらはす。

浪が荒くても出帆しよう。

○<sup>ど</sup><sup>ども</sup>は口語では**けれど**<sup>ども</sup>となつて用言の終止形に結びついて**確定**の條件をあらはす。

浪が荒い <sup>けれど</sup> <sup>ども</sup> 出帆した。

○<sup>とも</sup>を動詞及び動詞のやうに活用する助動詞の連體形に結びついて、

數百年を経るとも變らじ。

如何に批評せらるるとも意に介せじ。

強ひて之を遵奉せしむるともその效あるまじ。

のやうにするのは正格ではないが、現代文では之を許容されてゐる。

○<sup>とも</sup><sup>ども</sup>の代りとして現代文では<sup>も</sup>を用ひることがある。

何等の理由あるも<sup>ありとも</sup>、議場に入ること許さず。

期限は今日に迫りたるも<sup>たれども</sup>、準備は未だ成らず。



たゞし誤解を生ずる恐ある場合、例へば

請願書は會議に付するも(すとも)之を朗讀せず。

給料は低きも(くとも)應募者は多かるべし。

のやうなのは之を用ひない。

練習

(一) 次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正しなさい。

〔例〕 霽(假定にする、故に未然からはにつける)るれば出でてむと待つ雨の夕(なれども)になる(確定にする、故に已然からどもにつける)とも止みもせず。

一 志を立て、郷貫を出でたるわれ、學もし成らずむば死せどもかへらじ。

二 家亡べども恨みんともせず、國衰へども悲しむことを知らず。歎すべきかな。

三 たとひ一度失敗したれども、決して初志を棄てることなかれ。

四 かれ老ひたりとも、戦場にのぞめば必ず壯者を凌がむ。

五 もし御意見も候へば、ゆめ／＼御遠慮下されまじく候。

(二) 例を擧げて次の句の意義を文法上から説明しなさい。

イ 無くば、

ロ 無ければ、

ハ 無かりせば、

なな……そ

御油斷あるな。

近く寄つて過(あやまち)すな。

人に疎んぜらるな。

なは右のやうにラ行變格の動詞には連體形に、その他の動詞には終止形に結びついて禁止の意をあらはす。

な・な……そ

な 來  
爲 所

な行き給ひそ。

右の例のやうに、な……その形で禁止の意をあらはすこともある。この場合にはその中間にある動詞は、カ行サ行兩變格の動詞は未然形、その他の動詞は、連用形である。

○口語の場合もなを用ひるが、文語のラ行變格の動詞は口語では四段に活用するから、口語の禁止のなはすべての動詞の終止形に結びつく。

や・か

④ や・か

有りや無しや。

有りきや無かりきや。

有るか無きか。

有りしか無かりしか。

右の例のやうに、やは用言の終止形に、かはその連體形に結びついて疑問の意をあらはす。

○現代文では、やを連體形に結びつけて、

こゝに有るや。

面白きや。

父に似たるや母に似たるや。

のやうに用ひることもある。

○口語では、

來るか來ないか。

あの話を聞いたか。

のやうに、かだけが疑問の意をあらはす。

何を書くか。

答、幾、何なるか。

春と秋といづれがよきか。

右の例のやうに、何、幾、何、いづれなどの疑問の語が上にある場合には、**はか**を用ひて文を結ぶ。

○現代文では、

幾、何なりや。

如何にすべきや。

のやうに、上に疑問の語のある場合でも、**や**を用ひることがある。

人やある。

春や疾き花や遅き。

花や咲きたる鶯や鳴きつる。

誰がある。

昨と今といづれか楽しいき。

いかでか知らむ。

右の例のやうに、**や**か**は**は用言の前に置いて疑問の意をあらはすこともある。この場合には下は連體形で結ぶ。

浪にたゞよふ氷山も、來らば來れ恐れむや。

精神一到何事か成らざらむ。

右の例のやうに、**や**か**は**は疑問の意から轉じて反語となる。

○口語では、

誰がそんな事をするものか。

のやうにかだけが反語の意をあらはす。

○**や**か**は**に詠歎の意をあらはす助詞は**はか**を加へた**やはか**はもまた反語の

助詞で、**や**かよりは一層意味が強い。

いかで人に劣らむやは。

かほどの道理誰かは思ひよらざらむ。

⑤ **ぞ・なむ・こそ**

たびねする草の枕に霜さえて、有明の月の影ぞまたる。

ぞ・なむ・こそ

これなむ都鳥とは呼ぶなる。  
右の例のぞなむは強く指し示す意をあらはす助詞で、下は連體形  
で結ぶ。

八重葎やへむらしげれるやどのさびしさに、人こそ見えね、秋は來に  
けり。

人は愛敬ありて言葉多からぬこそよけれ。

右の例のこそはぞなむよりも一層強く指し示す意をあらはす助  
詞で、下は已然形で結ぶ。

上にぞなむ又はやかのある場合に下を連體形で結び、上にこそ  
ある場合に下を已然形で結ぶことを係結といひ、上のぞなむやか  
及びこそを係といひ、下の特別の活用形を取つた語を結といふ。

○もし結となる語を直に次の語につゞける場合には、次の例のやうに  
その結はあらはれないで自然に隠れてしまふ。

係結

人々なむ別れがたく思ひて、頻りにとかくののしる中に夜ふけ  
ぬ。

古は車もたげよとこそいひしを、今様の人は、もてあげよといふ。

○口語ではぞこそなどが用ひられても、文の結びには何等の關係も及  
ばさない。

誰ぞ手傳に來てくれませんか。

ようこそいらつしやいました。

練習

次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正しなさい。

〔例〕 田舎に生れたるこそ幸なりと思ひなれ(こそ)の結、故に已然(たり)終止にする。 たれ。

一 弓を射らんとするものは、姿勢を正しふし、一本の矢をもあだにな  
せじと思ひて心をゆるむるべからず。

二 とやせんかくやすべしと案じわづらう。

- 三 住居を定むるに、都會と田舎とはいづれがよしと君は信じらるるや。
- 四 我こそは熊谷二郎直實なりと高らかに名乗りけれ。
- 五 この川に沿ふて行けば寺の前に出ずべし。その隣の家ぞ君の訪ぬる家なりと教へたる。
- 六 いつこゝを立去りたりやと何人に問はるるとも、必ずそれに答ふるな。
- 七 庭に植ゆる草木も、伸びたるを抑え、たふれたるを起しなどしてこそ、よき姿にはなるなりとききしか。
- 八 昔受けまじき罪をうけこの地に生を終りし人の裔、今もなほあるやと尋ぬれば、かたへに青ざめる顔して立ちし一青年を指して、彼こそそれと教へけれ。
- 九 開闢より以來かゝることあるべくとも覺へず、神明の程こそ有難しと東天に向ひてしばし祈願をこめられける。

と

六と

月と花とを賞す。

これ偏に徳あると徳なきとによるなり。

世に用ひらるると用ひられざるとは、固より彼が問ふところにあらず。

右の例のやうに、とは事物を並列する場合に用ひられ、語句ごとに幾つでも重ねるのが本則である。

○このとは體言に結びつく語であるが、用言にはその連體形に結びつく。この場合はその連體形の下にあるべきことなどの省略されたものと見てよい。

○現代文では、

宗教と教育の關係を論ず。

京都と神戸と長崎へ行く。

のやうに、誤解を生じない場合には最後のとを省くことがある。但

し、

日曜と大祭日の翌日は休刊。

のやうに、

日曜と大祭日との翌日は休刊。

日曜と大祭日の翌日とは休刊。

と意味が二種に解せられるものは、これを省いてはならない。

彼は毎朝五時に起くといふ。

ものいへば唇寒しといふ句あり。

孟子は性は善なりといへり。

右の例のとは、上の文を受けてそれを指示する意をあらはす助詞で、通常用言の終止形に結びつく。

○このとは、上の文に係結の助詞がある場合には用言の連體形または已然形と結びつき、上の文が命令の意味をあらはす時は命令形に結びつく。

人やあると問ふ。

何の恥づるところかあるべきといふ。

もののはれは秋こそ、まされと人ごとにいふゆり。

急がばまはれといふ諺あり。

○現代文では、

月出づると見えて……。

終日業務を取扱はしむるといふ。

のやうに、上の係結の助詞がなくても連體形に結びつくこともある。

練習

(一) 次の文の中にあるとの意味の異同を説明しなさい。

イ 古語にいはく、妖は徳に勝たずと。

ロ 悔ゆとも及ばじ。

ハ 取ると取らざるとは汝にまかす。

(二) 次の文の意味の異同を説明しなさい。

- イ 童子・文子と雪子を訪ふ。
- ロ 童子と文子と雪子を訪ふ。
- ハ 童子・文子と雪子とを訪ふ。

に・へ

① に・へ

- 東京に着く。
- 門前にたゝずむ。
- 東京へ行く。
- 南へ南へと進む。

右の例のには動作の歸着する點をあらはし、へは動作の進行する方向をあらはす。

○口語では殆どこの區別がない。

東京へに着く。

東京にいく。

だに・すら  
さへ

② だに・すらさへ

鳥にだに若かず。  
禽獸すら恩を知る。  
右の例のだに・すらは、軽い方を舉げて重い方を類推させる意をあらはす。

○口語では、

鳥にさへ及ばない。  
禽獸でも恩を知る。

のやうに、さへてもを用ひる。

雨降るに風さへ加はりぬ。

己が名のみかは、親の名さへ出でぬべし。

右の例のさへは、あるが上になほ物の添ひ加はる意をあらはす。

○口語ではまてを用ひる。

ばや・なむ

加 ばや・なむ

雨が降るのに風まで加はつた。  
自分の名だけか、親の名までが出るだらう。

心あらむ人に見せばや津の國の難波あたりの春のけしきを。

高砂のをのへの櫻咲きにけり、外山とよの霞たたずもあらなむ。  
右の例のばや・なむは願望の意をあらはす助詞で、いづれも用言の未然形に結びつく。

十 し

思出の深き船路や、つゝ、かなく今日しも果てぬ。  
時に范蠡なきにしもあらず。

右の例のしは語意を強める場合に用ひられる助詞で、主として體言や助詞に結びつく。

練習

(一) 次の文に誤があれば、その理由を述べて訂正しなさい。

[例] 此處へ塵芥（動作の歸着點）を捨てるべからず。  
（つゝ、つ下二、終止）

- 一 洋服地と帽子の見本を送れ。
- 二 金澤に行き兼六園へ遊ぶ。
- 三 立錫の餘地さへ無かりきとぞ。
- 四 雨やみて月すら明なるに、いかで此の良夜を空しふすべし。

(二) 次の文の傍線を施した助詞の用法を説明しなさい。

[例] 聲たえず鳴けやうぐひす、一年にふたゝびとだ（類推）に來べき春（反語）かは。

- 一 住む館（た）より出でて船に乗るべき處へ渡る。
- 二 生きとし生けるもの誰か子を愛せざらん。



- 三 三とせすぎてぞ浦島は故郷に歸りけるとなむ。
- 四 月をだにあかす思ひて寝ぬものを郭公さへ鳴きしきるかな。
- 五 鶯は谷の古巢を出でぬとも、わが行方をば忘れざらなむ。
- 六 朝夕なくてかなはざらむ物こそあらめ、その外は何も持たでぞあらまほしき。

第九章 感動詞

- 一 あら面白の景色やな。
  - 二 あはれ今年こゝろの秋も往ぬめり。
  - 三 やれ、これで自分の責任も果された。(口)
- 右の例のあらあはれやれ、などは強い感情の刺戟によつて自然に發する語で、いづれも感動詞である。
- 四 やあ、正綱頼將が十四歳に遇ふこと再びやあるべき。
  - 五 いかにも、與一、あの扇の眞中射て敵に見物せさせよかし。

六 さあ、始めよう。(口)

感動詞には右のやあ、いかに、さあなどのやうに、呼びかけたり誘つたりするものもある。

○「悲しいかな」「行けや人々」のかなやのやうに、文の中間又は末尾にあるものは、詠歎の意をあらはす助詞である。

練習

次の文から感動詞を選び出しなさい。

- 〔例〕 おや大變だ。まあどうしよう。(口)
- 一 いで、軍艦に乘組みて、我は護らむ海の國。
  - 二 大手搦手の寄手これを見て、すはや、大塔宮の御自害あるは、我先に御首を賜らむとて、四方の圍を解いて一所に集まる。
  - 三 あつばれ名馬や、何者の馬ぞ。
  - 四 あなあはれ、尊き神の宮居かな。

第十章 紛れ易い文語品詞

品詞の中には語形が同じでもその所屬を異にするものがあつて極めて紛れ易いから次にその主なものを示さう。

① し 生き残りしもの。  
(過去の助動詞きの連體形)

生きとし生けるもの。  
(語意を強める助詞)

② しか 斃るゝまでこそ戦ひしか。  
(過去の助動詞きの已然形)

③ しか 召されしかば参りき。  
(同)

何事もなかりしか。  
(過去の助動詞きの連體形に疑問の助詞かが結びついたもの)

雨霽れなば行かむ。  
(完了の助動詞ぬの未然形)

軒端の梅よ春を忘るな。  
(禁止の助詞)

④ な 花の色はうつりにけりな。  
(詠歎の助詞)

あそび暮さな。  
(願望の助詞)

に ぬ ね ばや なむ

④ に 死にし子顔よかりき。  
(ナ變動詞死ぬの連用形の語尾)

聲をあげてぞ泣きにける。  
(完了の助動詞ぬの連用形)

⑤ ぬ 春來れるに花咲かず。  
(反對の意をあらはす助詞)

花咲きぬ。  
(完了の助動詞)

⑥ ね 來ぬ人を待つ。  
(打消の助動詞すの連體形)

人こそ見えね秋は來にけり。  
(打消の助動詞すの已然形)

⑦ なむ とく去りねなどのたまふ。  
(完了の助動詞ぬの命令形)

故郷に歸りなむ。  
(完了の助動詞ぬの未然形に未來の助動詞むの結びついたもの)

⑧ なむ 故郷に歸らなむ。  
(願望の助詞)

故郷になむ歸りける。  
(係結の助詞)

⑨ ばや 心あらむ人に見せばや。  
(願望の助詞)

心あてに折らばや折らむ。  
(假定の助詞ばに疑問の助詞やの結びついたもの)

⑩ ばや 紅葉すればや照りまさるらむ。  
(確定の助詞ばに疑問の助詞やの結びついたもの)

なり

九なり

燈下親しむべき時となりぬ。  
夕立すなり富岡のさと。  
彼は余を欺きたるなり。  
山は紫に、水は明かなり。  
君君たり、臣臣たり。  
空うららかに晴れたり。  
百花爛漫たり。

(ラ行四段の動詞)  
(詠歎の助動詞)  
(指定の助動詞)  
(形容動詞の語尾)  
(指定の助動詞)  
(完了の助動詞)  
(形容動詞の語尾)

たり

十たり

しづ心なく花のちるらむ。  
心知れらむ人に見せばや。

(推量の助動詞)  
(完了の助動詞)  
(形容動詞の語尾)

らむ

十一らむ

奥山に入りにし人は歸り來ぬ。  
才なき身にしあれば望も絶えぬ。  
必ずこの日をあやまり給ふな。  
「信ある言を告げなば齡も延びなんに。」と伴ひて家に歸る。  
昨日こそ年ははてしか春がすみ春日の山にはやたちけり。  
うなぎ釣る舟たゞ一つ見えしかどいつしかそれも見えずな  
りにき。

(推量の助動詞)  
(完了の助動詞)  
(形容動詞の語尾)  
(推量の助動詞)  
(完了の助動詞)  
(形容動詞の語尾)  
(推量の助動詞)  
(完了の助動詞)  
(形容動詞の語尾)

練習

次の文の傍線を施した部分の異同を説明しなさい。

例

(イ) 花は咲けりや。  
(ロ) 珍らしやこの花。

疑問の助詞  
詠歎の助詞

一

(イ) 奥山に入りにし人は歸り來ぬ。  
(ロ) 才なき身にしあれば望も絶えぬ。

二

(イ) 必ずこの日をあやまり給ふな。  
(ロ) 「信ある言を告げなば齡も延びなんに。」と伴ひて家に歸る。

三

(イ) 昨日こそ年ははてしか春がすみ春日の山にはやたちけり。  
(ロ) うなぎ釣る舟たゞ一つ見えしかどいつしかそれも見えずな

四

(イ) 庭の面はまだ乾かぬに、夕立の空さりげなくすめる月かな。  
(ロ) 往にし安元三年四月二十八日かとよ。

五

(イ) 山巔に達せざるに足は蹇へにけり。  
(ロ) 花無ければや人の訪ひ來ぬ。

五

(イ) 問はばや遠き世々の跡。  
(ロ) 問はばや遠き世々の跡。

六

(ホ) (ニ) (ハ) (ロ) (イ)

ふるさとそぞろにしのばれて、いとも露けき秋にぞありける。用事をはれるものは早く退出して、他人に迷惑をかくな。あすの祭えを願へばこそ、けふのなほざりは許されね。掃除坊主は罪もなく蜂にさされて、頼む御堂の蔭もうらめし。師のとぶらはれし情の深さは、たまひし家づとの數々よりも嬉し。

七

(イ) (ロ)

囊中の文書は、皆岩倉公の蟄居中に計畫せられて、玉松操といふ人に起草せしめられつる復古經綸の策案なりき。捨てられし兒の心まで思ひやられてあはれなり。

八

(ハ) (ロ) (イ)

再び歸り來べき都ならねばとて、一門の邸宅を悉く一炬の煙となしはてぬ。君國の爲に死ね。疾く往きねかし。

九

(ホ) (ニ) (ハ) (ロ) (イ)

鳴く鶯の聲すなり。かの山は富士山なり。その謀空しくなりにけり。波靜かなり。風となり、雨となりぬ。

一〇

(ハ) (ロ) (イ)

この時の彼の態度は實に堂々たるものなりき。主人はいたく寝入りたり。國家の柱石たり。

一一

(ロ) (イ)

祝ふ今日こそ樂しけれ。かくこそありけれ。

一二

(ロ) (イ)

御配慮まことにかたじけない。(ロ) いかなる時代の伸展にも青年の努力を伴はない場合はない。(ロ)

(イ) このやどのあるじにやあらむよなかにおき出でてさもいみじき雨風かな。かくて明日は必ずはれなむとぞいふなる。ふせりていかでさもあらなむとねんじをり。折にかなひて面白きこといひあへりとなむ。子を思ふ道をぞ祈るすべらぎに仕ふるあとをたがへざらなむ。

(ニ) かたちこそみやまがくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ。

(ホ) 柿本人麻呂なむ歌の聖なりける。

(イ) 昔のすみかは跡もとどめず人訪はぬ野らと荒れ果てたり。都のつはものは擧つて引き返しぬ。正行が軍のあまり強きに。

(ハ) をさなこのまぬとしはなけれどもなほ親に似るものなりけり。

文  
第一章 文の成分

主語 述語

主語・述語

鳥 主語 飛ぶ 述語  
 風 主語 清し 述語  
 水 主語 澄んでゐる 述語

右の例のやうに主語は文の主題となり、述語は主題の動作・有様などを述べる語である。文は主語と述語とが結びついて一つのまとまつた思想をいひあらはすもので、正式の文には必ず主語と述語とが備はつてゐる。

○主語は、おもに體言が單獨かまたは助詞と結びついたものから成るが、又

過ぎたるは及ばざるが如し。

辱かたじけなきは親のいつくしみなり。

のやうに、體言に準ずるものも主語となる。

○述語は、おもに用言が單獨かまたは助詞と結びついたものから成るが、又

汝なれは誰ぞ。

風景繪の如し。

あれでも人間だらうか。(口)

のやうに、體言と助詞や助動詞と結びついたものも述語となる。

○一つの文に主語も述語も重なることがある。

梅も桃も櫻も咲いた。(口)

その徳行仰ぐべし貴むべし。

補語

① 補語

一郎も二郎も勉強し運動す。

雁補語が空補語を飛ぶ。(口)

湯補語が水補語となる。(口)

信長補語光秀補語に討たる。

病補語は口より入る。

右の例のやうに、補語は述語の意味を補うてその文意を完全にす  
る語である。

○補語はおもに體言にをとによりなどの助詞の結びついたものであ  
るが、又

水は低きに随ふ。

老人が若いのに扶けられる。(口)

のやうに體言に準ずるものも補語となる。

修飾語

○一つの文に補語が二つ以上あることもある。

教師生徒に文法を授く。

弟は犬に名をジョンとつけた。(口)

㊦ 修飾語

遠き山々霞みわたる。

富士山は皚々たる白雪を戴く。

風烈しく吹く。

右の例のやうに、修飾語は主語・述語・補語を修飾する語である。

修飾語には次の二種がある。

(イ) 形容詞的修飾語

健全なる精神は健全なる身體に宿る。

雄辯な彼は幾多の聴衆に深い感激を與へた。(口)

右の例のやうに、體言を修飾するものを形容詞的修飾語といふ。

(イ) 形容詞的修飾語

(ロ) 副詞的修飾語

○形容詞的修飾語は幾つも重なつて同じ體言を修飾する事がある。

廣い深い湖水が森の中にあります。(口)

飛行機が晴れた靜かな空を飛んでゆく。(口)

(ロ) 副詞的修飾語

大河洋々として流る。

船は飛ぶが如く進みたり。

遙かに富士の山が見える。(口)

右の例のやうに用言を修飾するものを副詞的修飾語といふ。

○副詞的修飾語は幾つも重なつて同じ用言を修飾することもあり、

又他の副詞的修飾語を修飾することもある。

群衆は東からも西からも集つた。(口)

夕日いと美しく輝く。

獨立語

④ 獨立語

日すでに暮れぬ。されど宿るべき所もなし。  
 やあ、いかに、あれなるは佐野源左衛門の尉常世か。  
 瓢や、瓢や、我汝を愛す。  
 會長は、會員これを互選す。

右の例の、されど(接續の語)、やあ、いかに(感動の語)、瓢や(呼掛の語)、會長は(提示の語)のやうに、文の主要部から獨立するものを獨立語といふ。

文の成分

以上述べた主語・述語・補語・修飾語・獨立語のやうに文を構成する要素を文の成分といふ。

練習

(一) 次の文を文の成分に分けなさい。

〔例〕 子供は餘念なく、<sup>主</sup> 麩を追ふ、<sup>修</sup> 池の鯉魚を見守る。<sup>補</sup>

- 一 艱難汝を玉にす。
  - 二 荒れ果てたる城址は、はやく狐狸の住家となれり。
  - 三 爛漫たる櫻花、さながら雲の如く霞の如し。
  - 四 我は未だ峻しく且高き山に登らず。
  - 五 帝國議會は毎年之を召集す。
  - 六 いかに母御前、父はいづくにましますぞや。
  - 七 道ばたの木樅は馬に喰はれけり。
  - 八 瓶にさす藤の花房、短ければ疊の上にとゞかざりけり。
  - 九 向ふに見えるのが私の學校です。(口)
  - 一〇 この會社は品行のよい人ばかり雇ひます。(口)
  - 一一 梅子さん、あなたはよくまあ、そんなに早く起きられましたね。(口)
- (二) 「今日」といふ語を修飾語にした文と主語にした文とを一つずつ作りな



正序

① 正序

文の成分はこれを排列するにほゞ一定の順序がある。

(一) 主語は述語の上であり、述語は主語の下にある。

月出づ。

空が青い。(口)

(二) 補語は主語と述語との間にある。

仁者は山を楽しむ。

弟が植木に水をやつてゐる。(口)

(三) 修飾語は修飾される語の上にある。但し、述語の修飾語は主

さい。

第二章 文の成分の位置及び省略

倒置

① 倒置

文の意味を強め又は言葉の調子を整へるために、わざと成分の位置を顛倒することがある。

(一) 主語・述語の倒置

語のすぐ下にあることが多い。

我が軍大いに敵兵を撃破せり。

小さい子供達が面白さうに野球の話をしてゐた。(口)

(四) 独立語は文の首位にある。但し、接續の語は接續すべき語句

又は文の間にある。

あ、日が出はじめた。(口)

姉は刺繡をなし、而して妹は編物をなす。

なつかしや、我が故郷。

開け、この花。

(二) 補語の倒置

雲のいづこに月やどるらむ。

あなたは御承知ですか、この問題の解式を。

(三) 修飾語の倒置

私は忍ばん堪へ難くとも。

それは大變てしたね實に。

(四) 獨立語の倒置

あれ見給へ、箱王殿。

もうだめだ、あゝ。

省略

③ 省略

文を簡潔にし又は語勢を強めるために、意味の明確を失はない範圍に於て或成分を省略することがある。

(一) 主語の省略

(汝は)前へ進め。

(我々は)公園の樹木を愛しませう。

(二) 述語の省略

千里の道も一步より(始まる)。

皆さんこちらへ(おいで下さい)。

(三) 補語の省略

我は少しも(それを)知らざりき。

妹が(家に)歸つた。

○以上はいづれも文の成分を省略したものであるが、この外、成分の主

要でない部分を省略することもある。

勉強は幸福の母(なり)。

人は人(だ)、我は我(だ)。(口)

練習

(一) 次の文の省略された部分は補ひ、倒置されたものは正しい順序に置き換へなさい。

〔例〕 元朝の見るものにせん富士の山(を)我は(は)

- 一 正直の頭に神宿る。
- 二 とまれ蝶々、咲く花に。
- 三 苦は樂の種、樂は苦の種。
- 四 土手に登るべからず。
- 五 福は内、鬼は外。
- 六 清水の上から出たり春の月。

- 七 花の陰あかの他人は無かりけり。
  - 八 優勝旗を會長が授與せられた。(口)
  - 九 そんな事をあなたは誰から聞いたのですか。(口)
- (二) 次の文の主語を示しなさい。

〔例〕 あなたは何時時出發しますか。(口)

- 一 御主人様にはいかゞ御くらし遊ばされ候や。
- 二 昨日の雨には閉口した。(口)
- 三 信子や、火燧の火は消えたかね。(口)
- 四 私もつれて行つて下さい。(口)
- 五 狐と虎がやつてくる。(口)
- 六 子供が犬と遊んでゐた。(口)
- 七 お茶でもあがれ。(口)

第三章 節

花咲く。

香が高い。(口)

右の例は、いづれも主語と述語とを備へた完全な文である。然るに、今これが

花咲く春も近づきぬ。

梅の花は香が高い。(口)

のやうに用ひられる時には、大きな文の一部分となる。かやうに、文が他の文の一部分となつたものを節といふ。

節には主語節・述語節・補語節・修飾節・對立節の五種がある。

●主語節 主語の用をする節。

花の美しきは櫻なり。

主語節

節

●述語節 述語の用をする節。

●述語節 述語の用をする節。

象は體大なり。

牡丹の花は色が美しい。(口)

●補語節 補語の用をする節。

補語節

誰か身體の健康なるを欲せざらん。

観客は花火のあがるのを待つてゐる。(口)

●修飾節 修飾語の用をする節。

修飾節

能ある鷹は爪をかくす。

風が吹くので花が散る。(口)

●對立節 對立的に結びついてゐる節。

對立節

夏は暑く、冬は寒し。

垣は崩れ、屋根は漏り、壁は落ち、家は傾いてゐる。(口)

練習

次の文から節を選び出し、その種類を述べなさい。

〔例〕 君子は人の己補語節を知らざるを憂へず。

主補述

- 一 春の水山なき國を流れけり。
- 二 雪は鵝毛の飛ぶが如し。
- 三 今年は枝が折れる程實がなりました。(口)
- 四 花の咲いた木の下に人が大勢集つてゐる。(口)
- 五 子供達は飛行機が來たと手をうつて喜んだ。(口)
- 六 伯父は色の白い耳の長い小犬を飼つてゐる。(口)
- 七 私たちはそこで夜が明けるのを待ちました。(口)
- 八 水は方圓の器にしたがひ、人は善惡の友による。

第四章 文の種類

單文

文はその構造の上から、單文・複文・重文の三種に分ける。

① 單文

山高し。

父母の恩は、山よりも高く海よりも深し。

釋迦・孔子・キリスト・ソクラテスは世界の四聖である。(口)

右の例のやうに、主語と述語との文法上の關係がたゞ一回だけ成立する文を單文といふ。

複文

② 複文

花の散るは蝶の舞ふに似たり。

雨の降る日は陰氣だ。(口)

所變れば品變る。

重文

右の例のやうに、對立節以外の節を含む文を複文といふ。

㊦ 重文

去る者は追はず、來る者は拒まず。

月明かに、星稀に、鳥鵲南に飛ぶ。

右の例のやうに、對立節を含む文を重文といふ。

○文は右の三種であるが、實際はこれらが更に混合して頗る複雑な形を取るが多い。

花笑ひ鳥歌ふ、春は人の心ものどかなり。

(これは重文を含む複文である)

春來れば花咲き、秋來れば葉落つ。

(これは複文の對立する重文である)

春は花咲き鳥啼き、秋は紅葉照り蟲すだく。

(これは重文を含む複文の對立する重文である)

練習

次の文の構造について説明しなさい。

〔例〕 彼は主何時もとは補相手の様子主が違つてゐることに述氣付

いた。修 (口) (複文)

一 我等は時のうつるを知らざりき。

二 折節のうつりかはるこそ物ごとにあはれなれ。

三 大廈の將に覆らんとするは、一木のよく支ふる所にあらず。

四 規模の雄大にして建築の宏壯なる、實に天下に冠たり。

五 私の毎日通る道筋は、電車や自動車が絶間なく往來します。(口)

六 勝負がつかないから、兩方が仲直りをしました。(口)

七 二月十一日、國民は誰でもこのめでたい日を祝はぬ者は無い。(口)

八 幸子さん、お父さんはあなたの卒業する日を指折り數へてお待ちになつてゐます。(口)

現代 女子日本文法 上級用 終

附 録

文法上許容スベキ事項

(明治三十八年十二月二日 文部省告示第百五十八號)

- 一 「居リ」<sup>レ</sup>恨ム<sup>レ</sup>死ヌ<sup>レ</sup>ヲ 四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ。
- 二 「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ、「アシシ」<sup>レ</sup>イサマシシ「ナド用キル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。
- 三 過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ、終止言ニ用キルモ妨ナシ。  
(例) 火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ。
- 四 「コトナリ」<sup>レ</sup>異ヲ「コトナレリ」<sup>レ</sup>コトナリテ「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ。
- 五 「、セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ、之ニ從フモ妨ナシ。  
(例) 手習サス。  
周旋サス。

賣買サス。

六、「セラル」トイフベキ場合ニ、「サル」ト用キル習慣アルモノハ、之ニ従フモ妨ナシ。

(例) 罪サル。

許サル。

解釋サル。

七、「得シム」トイフ場合ニ、「得セシム」ト用キルモ妨ナシ。

(例) 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

上下貴賤ノ別ナク、各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ。

八、佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シシカ」ニ連ネテ、「暮シシ時」「過シシカバ」ナド

イフベキ場合ヲ、「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ。

(例) 唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

攻撃開始ヨリ陥落マデ、僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

九、てにをは「ハ」動詞・助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ。

(例) 花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ。

10、疑ノてにをは「ヤ」ハ、動詞・形容詞・助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

(例) 有ルヤ。

面白キヤ。

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ。

二、てにをは「トモ」ノ、動詞・使役ノ助動詞、及、受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ、之ニ従フモ妨ナシ。

(例) 數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラルルトモ。

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

三、てにをは「ト」ノ、動詞・使役ノ助動詞、受身ノ助動詞、及、時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ、之ニ従フモ妨ナシ。

(例) 月出ヅルト見エテ。

嘲弄セラル、ト思ヒテ。



終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。  
萬人皆其徳ヲ稱ヘケルトゾ。

三 語句ヲ列擧スル場合ニ用キルてにをは「ト」ハ、誤解ヲ生ゼザルトキニ限り、最  
終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

(例) 月ト花。

宗教ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例。

史記ト漢書①ノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書ノ列傳②ヲ讀ムベシ。

四 上ニ疑ノ語アルトキニ、下ニ疑ノてにをは「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

(例) 誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

五 てにをは「モ」ハ、誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「ト」モ或ハ「ド」モノ如ク用キルモ妨  
ナシ。

(例) 何等ノ事由アルモ(アリトモ)、議場ニ入ルコトヲ許サズ。

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)、準備ハ未ダ成ラズ。

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)、昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。

誤解ヲ生ズベキ例。

請願書ハ會議ニ付スルモ(ストドモ)、之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ(ケレドモ)、應募者ハ多カルベシ。

六 「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ。

(例) イハユル哺乳獸ナルモノ。

顔回ナルモノアリ。

〔終〕

心

	活下 一 用段	○ 活 ○ 用	上 二 段		活 上 用 一段											
捨	寄	受	(得)	(蹴)	懲	報	恨	強	落	起	(居)	(射)	(見)	(乾)	(似)	(着)
て	せ	け	え	け	り	い	み	ひ	ち	き	る	い	み	ひ	に	き
て	せ	け	え	け	り	い	み	ひ	ち	き	る	い	み	ひ	に	き
つ	す	く	う	ける	る	ゆ	む	ふ	つ	く	る	い	み	ひ	に	さ
つ	す	く	う	ける	る	ゆ	む	ふ	つ	く	る	い	み	ひ	に	さ
つ	す	く	う	ける	る	ゆ	む	ふ	つ	く	る	い	み	ひ	に	さ
つ	す	く	う	ける	る	ゆ	む	ふ	つ	く	る	い	み	ひ	に	さ
つ	す	く	う	ける	る	ゆ	む	ふ	つ	く	る	い	み	ひ	に	さ
つ	す	く	う	ける	る	ゆ	む	ふ	つ	く	る	い	み	ひ	に	さ
つ	す	く	う	ける	る	ゆ	む	ふ	つ	く	る	い	み	ひ	に	さ
つ	す	く	う	ける	る	ゆ	む	ふ	つ	く	る	い	み	ひ	に	さ
て	せ	け	え	け	り	い	み	ひ	ち	き	る	い	み	ひ	に	き
て	せ	け	え	け	り	い	み	ひ	ち	き	る	い	み	ひ	に	き

活 上  
用 一段

捨	寄	受	(得)	(蹴)	懲	報	恨	強	落	起	(居)	(射)	(見)	(乾)	(似)	(着)
て	せ	け	え	け	り	い	み	ひ	ち	き	る	い	み	ひ	に	き
て	せ	け	え	け	り	い	み	ひ	ち	き	る	い	み	ひ	に	き
て	せ	ける	える	ける	り	い	み	ひ	ち	き	る	い	み	ひ	に	さ
て	せ	ける	える	ける	り	い	み	ひ	ち	き	る	い	み	ひ	に	さ
て	せ	ける	える	ける	り	い	み	ひ	ち	き	る	い	み	ひ	に	さ
て	せ	ける	える	ける	り	い	み	ひ	ち	き	る	い	み	ひ	に	さ
て	せ	ける	える	ける	り	い	み	ひ	ち	き	る	い	み	ひ	に	さ
て	せ	ける	える	ける	り	い	み	ひ	ち	き	る	い	み	ひ	に	さ
て	せ	ける	える	ける	り	い	み	ひ	ち	き	る	い	み	ひ	に	さ
て	せ	け	え	け	り	い	み	ひ	ち	き	る	い	み	ひ	に	き
て	せ	け	え	け	り	い	み	ひ	ち	き	る	い	み	ひ	に	き

三

一

二

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

二十一

二十二

二十三

二十四

二十五

二十六

二十七

二十八

二十九

三十

三十一

三十二

三十三

三十四

三十五

三十六

三十七

三十八

三十九

四十

四十一

四十二

四十三

四十四

四十五

四十六

四十七

四十八

四十九

五十

五十一

五十二

五十三

五十四

五十五

五十六

五十七

五十八

五十九

六十

六十一

六十二

六十三

六十四

六十五

六十六

六十七

六十八

六十九

七十

七十一

七十二

七十三

七十四

七十五

七十六

七十七

七十八

七十九

八十

八十一

八十二

八十三

八十四

八十五

八十六

八十七

八十八

八十九

九十

九十一

九十二

九十三

九十四

九十五

九十六

九十七

九十八

九十九

一百

一 動詞の活用表

上二段		活 上 一 段 用							變サ格活用行	變カ格活用行	變ナ格活用行	變ラ格活用行	四段活用					活用名		
強	落	起	(居)	(射)	(見)	(乾)	(似)	(着)	(爲)	(來)	死	有	歸	讀	問	立	押	聞	語幹	
ひ	ち	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	せ	こ	な	ら	ら	ま	は	た	さ	か	未然形	
ひ	ち	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	し	き	に	り	り	み	ひ	ち	し	き	連用形	
ふ	つ	く	ゐ	い	みる	ひる	に	きる	す	く	ぬ	り	る	む	ふ	つ	す	く	終止形	
ふる	つる	くる	ゐ	い	みる	ひる	に	きる	する	くる	ぬ	る	る	む	ふ	つ	す	く	連體形	
ふれ	つれ	くれ	ゐ	い	み	ひ	に	き	す	く	ぬ	れ	れ	め	へ	て	せ	け	已然形	
ひよ	ちよ	きよ	ゐ	い	み	ひ	に	き	せよ	こよ	ね	れ	れ	め	へ	て	せ	け	命令形	
活 上 一 段 用		活 上 一 段 用							變サ格活用行	變カ格活用行	四段活用					活用名				
強	落	起	(居)	(射)	(見)	(乾)	(似)	(着)	(爲)	(來)	死	有	歸	讀	問	立	押	聞	語幹	
ひ	ち	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	し	せ	こ	な	ら	ら	ま	は	た	さ	か	未然形
ひ	ち	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	し	き	に	り	り	み	ひ	ち	し	き	連用形	
ひる	ちる	きる	ゐ	い	みる	ひる	に	きる	する	くる	ぬ	る	る	む	ふ	つ	す	く	終止形	
ひる	ちる	きる	ゐ	い	みる	ひる	に	きる	する	くる	ぬ	る	る	む	ふ	つ	す	く	連體形	
ひれ	ちれ	くれ	ゐ	い	み	ひ	に	き	す	く	ぬ	れ	れ	め	へ	て	せ	け	假定形	
ひよ	ちよ	きよ	ゐ	い	み	ひ	に	き	せよ	こい	ね	れ	れ	め	へ	て	せ	け	命令形	

文

語

語

尾

口

語

語

尾

控  
○

控  
○

○

二 形容詞の活用表

活用名		語幹	尾
ク活用	シク活用		
善	美	語幹	尾
く	しく	連用形	終止形
く	しく	連用形	終止形
し	し	連體形	已然形
き	しき	連體形	已然形
けれ	しけれ	連體形	已然形

活下二段										活上一段										變格活用	變格活用	變格活用	變格活用	四段活用									
植	晴	榮	攻	堪	兼	捨	寄	受	(得)	(蹴)	懲	報	恨	強	落	起	(居)	(射)	(見)	(乾)	(似)	(着)	(爲)	(來)	死	有	歸	讀	問	立	押	聞	
ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	け	り	い	み	ひ	ち	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	せ	こ	な	ら	ら	ま	は	た	さ	か	
ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	け	り	い	み	ひ	ち	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	し	き	に	り	り	み	ひ	ち	し	き	
う	る	ゆる	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	ける	る	ゆる	む	ふ	つ	く	ゐ	い	み	ひ	に	る	す	く	ぬ	り	る	む	ふ	つ	す	く	
う	る	ゆる	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	ける	る	ゆる	む	ふ	つ	く	ゐ	い	み	ひ	に	る	する	くる	ぬ	る	る	む	ふ	つ	す	く	
う	れ	ゆる	む	ふ	ぬ	つ	す	くれ	う	けれ	る	ゆる	む	ふ	つ	くれ	ゐ	い	み	ひ	に	る	す	くれ	ぬ	れ	れ	め	へ	て	せ	け	
ゑ	よ	えよ	めよ	へよ	ねよ	てよ	せよ	けよ	えよ	けよ	りよ	いよ	みよ	ひよ	ちよ	きよ	ゐよ	いよ	みよ	ひよ	によ	きよ	せよ	こよ	ね	れ	れ	め	へ	て	せ	け	

活下二段										活上一段										變格活用	變格活用	四段活用											
植	晴	榮	攻	堪	兼	捨	寄	受	(得)	(蹴)	懲	報	恨	強	落	起	(居)	(射)	(見)	(乾)	(似)	(着)	(爲)	(來)	死	有	歸	讀	問	立	押	聞	
ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	け	り	い	み	ひ	ち	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	し	せ	こ	な	ら	ら	ま	は	た	さ	か
ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	け	り	い	み	ひ	ち	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	し	き	に	り	り	み	ひ	ち	し	き	
ゑ	る	ゆる	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	ける	る	ゆる	む	ふ	つ	く	ゐ	い	み	ひ	に	る	する	くる	ぬ	る	る	む	ふ	つ	す	く	
ゑ	る	ゆる	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	ける	る	ゆる	む	ふ	つ	く	ゐ	い	み	ひ	に	る	する	くる	ぬ	る	る	む	ふ	つ	す	く	
ゑ	れ	ゆる	む	ふ	ぬ	つ	す	くれ	う	けれ	る	ゆる	む	ふ	つ	くれ	ゐ	い	み	ひ	に	る	す	くれ	ぬ	れ	れ	め	へ	て	せ	け	
ゑ	よ	えよ	めよ	へよ	ねよ	てよ	せよ	けよ	えよ	けよ	りよ	いよ	みよ	ひよ	ちよ	きよ	ゐよ	いよ	みよ	ひよ	によ	きよ	せよ	こい	ね	れ	れ	め	へ	て	せ	け	



### 四動詞と助動詞との接続表

		文				語				
未 然 形 に	る	つ	ぬ	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)
	す	ぬ	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
	らる	たり	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
	さす	たり	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
		カ變・サ變は例外				ラ變は連體に				
連 用 形 に	る	つ	ぬ	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)
	す	ぬ	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
	らる	たり	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
	さす	たり	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
		カ變・サ變は例外				ラ變は連體に				
終 止 形 に	る	つ	ぬ	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)
	す	ぬ	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
	らる	たり	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
	さす	たり	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
		カ變・サ變は例外				ラ變は連體に				
連 體 形 に	る	つ	ぬ	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)
	す	ぬ	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
	らる	たり	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
	さす	たり	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
		カ變・サ變は例外				ラ變は連體に				
未 然 形 に	る	つ	ぬ	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)
	す	ぬ	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
	らる	たり	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
	さす	たり	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
		カ變・サ變は例外				ラ變は連體に				
連 用 形 に	る	つ	ぬ	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)
	す	ぬ	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
	らる	たり	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
	さす	たり	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
		カ變・サ變は例外				ラ變は連體に				
終 止 形 に	る	つ	ぬ	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)
	す	ぬ	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
	らる	たり	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
	さす	たり	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
		カ變・サ變は例外				ラ變は連體に				
連 體 形 に	る	つ	ぬ	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)
	す	ぬ	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
	らる	たり	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
	さす	たり	たり	たり	らむ	まし	らむ	なり (指定)	り (四段)	
		カ變・サ變は例外				ラ變は連體に				

〔注意〕 指定の助動詞たりは體言だけに接続する。

昭和二十年十月二十九日  
**文部省檢定**  
 高等女學校・國語科用

發行所

東京市神田區錦町二丁目七番地  
 振替東京七九五七七番  
 大阪市東區博勞町五丁目  
 振替大阪九八二〇番

**英進社**

著者權所有



昭和十二年五月十五日 印刷  
 昭和十二年五月十五日 發行  
 昭和十二年十月十五日 訂正再版印刷  
 昭和十二年十月十五日 訂正再版發行

著者

八波則吉

發行兼印刷者  
 東京市神田區錦町二丁目七番地  
 佃要三郎

代理女子日本文法 (上級用)

定價六十錢

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

中華民國二十六年十二月二十五日  
 交際會館啟事  
 高郵縣政府·高郵縣教育館

本會定於十二月二十五日  
 下午二時在會館舉行  
 交際會館成立十周年紀念  
 暨慶祝大會  
 屆時請各界人士  
 踴躍參加  
 此啟



發行所

大高郵縣政府  
 高郵縣教育館  
 高郵縣交際會館  
 高郵縣圖書館  
 高郵縣立第一小學  
 高郵縣立第二小學  
 高郵縣立第三小學  
 高郵縣立第四小學  
 高郵縣立第五小學  
 高郵縣立第六小學  
 高郵縣立第七小學  
 高郵縣立第八小學  
 高郵縣立第九小學  
 高郵縣立第十小學

發行所 八 益 根 官

英 戲 坊

中華民國二十六年十二月二十五日





広島大学図書

2000033994

